

**新尾瀬ビジョン（仮称）改定の検討経過と今後のスケジュール（案）** 資料1-1

【H27年度】 H28 3月	<b>■尾瀬国立公園協議会</b> 10周年にむけてビジョンの再確認をする方針を報告し、ビジョンの課題と今後の進め方を検討 ・ビジョンの課題＝現状のレビューが必要、進捗状況の把握方法の改善が必要 ・今後の進め方＝幅広い関係者の意見集約、10周年を捉えた再確認、 <b>小委員会での検討</b>			
【H28年度】 H28 9-11月	関係者からのヒアリング及びアンケート調査を実施 (現在の尾瀬及びビジョンの課題について)			
12月	◆快適利用の促進（利用分散）に関する小委員会（1回目） ・「尾瀬ビジョンの再確認」について、目的、意見交換、再確認の進め方を共有 ・ヒアリング及びアンケート結果の報告 ・レビュー方針（案）とレビュー（案）の確認			
H29 2月	◆適正利用の推進に関する小委員会（2回目） ※名称変更 ・尾瀬ビジョンの再確認と今後の進め方について検討し、 <b>改定の方向性を確認</b> ・レビュー（案）の確認			
3月	<b>■尾瀬国立公園協議会</b> ・尾瀬ビジョンの再確認と今後の進め方について検討し、 <b>改定の方向性を確認</b> ・レビュー（案）の確認  <b>*改定の方向性*</b> ①尾瀬が目指すあり方の共有（尾瀬に関わる人たちが将来の尾瀬が目指すあり方を共有） ②構成上の課題の整理（管理計画との整合性、シンプルでわかりやすく共有しやすい）			
	関係者ヒアリング 関係者アンケート	骨子案	素案	案
【H29年度】 6月	開始			
7月	↓			
8月	<b>■平成29年8月30日～31日 尾瀬サミット2017・尾瀬国立公園10周年記念式典■</b> 改定における重要な意見交換の場として、3県知事や若者をはじめとした尾瀬関係者により「これからの尾瀬」について議論			
9月		「骨子案」作成開始		
10月				
11月	完了		ご意見をもとに	
12月		小委員会にて 「骨子案」検討	「事務局素案」作成開始	
H30 1月			小委員会構成員からの 意見聴取（書面）	
2月			「素案」作成開始	ご意見をもとに
3月			国立公園協議会にて 「素案」検討	「素案」修正開始
4月				協議会意見を踏まえた 修正版の意見照会（書面）
5月				↑
6月				意見照会を踏まえた修正・調整
7月				↑
8月				新ビジョンへの「熱」を高める取組み (例：地元意見交換会等) ↑ 「案」の最終調整（書面）
9月				9月上旬（予定）： 国立公園協議会にてビジョン承認 尾瀬サミットにてビジョンお披露目
以降	新ビジョンを踏まえた「尾瀬国立公園管理運営計画」の策定作業開始 （H26の新作成要領に基づく現行「管理計画」(H25.8)の改定）			

※国立公園管理運営計画 とは

「国立公園管理運営計画作成要領」（環境省自然環境局長通知）に基づき、各地方環境事務所長が作成する、管理運営のための計画

平成 30 年 3 月 22 日  
尾瀬国立公園協議会

## 「新尾瀬ビジョン（仮称）」の改定について

### 1. 現行の「尾瀬ビジョン」と「尾瀬国立公園協議会」

～21世紀の新しい国立公園にふさわしい保護・利用・管理運営のあり方とその具体化に向けて～

- 平成 18 年 11 月 30 日、多様な主体からなる「尾瀬の保護と利用のあり方検討会」が、「自然保護の原点」である「尾瀬」の現況や課題を受け、今後の尾瀬の保護と利用のあり方を示す「尾瀬ビジョン」を策定。
- これからの尾瀬の進むべき方向について検討し、21 世紀の新しい国立公園にふさわしい保護・利用・管理運営のあり方とその具体化に向けてつくられたもの。
- 尾瀬ビジョンにおける公園区域拡張の必要性に関する指摘をうけ、国立公園計画の再検討の結果、平成 19 年 8 月 30 日に、日光国立公園から分離して尾瀬国立公園が誕生。

#### <現行の「尾瀬ビジョン」の構成>

- 現行「尾瀬ビジョン」は本文と行動計画の 2 部構成
  - 本 文：自然や文化の成り立ち、尾瀬の現況、これまでの取組及び課題、尾瀬の保護管理における基本理念、基本方針
  - 行動計画：各課題の解決のため取り組むべきと考えられる諸対策  
短期的（概ね 5 年以内）に取り組むべき事項と中長期的（概ね 10 年以内）に取り組むべき事項とに整理

#### <尾瀬国立公園協議会の役割>

- 尾瀬ビジョンの進行促進・進行管理及び実現を目指すこと、及び参加型管理運営体制を構築することを目的として、「尾瀬の保護と利用のあり方検討会」の構成員をもとに、平成 20 年 1 月 18 日に「尾瀬国立公園協議会」を設置
- 尾瀬国立公園関係者が網羅的に参画しており、保護と適正な利用について一同に会して議論する場として機能
- 毎年度末に開催される協議会において、事項別に各主体の取組を報告・共有している

## 2. 「新尾瀬ビジョン」改定について

### (1) 尾瀬ビジョン改定の目的

現行の尾瀬ビジョンは、尾瀬国立公園分離独立の契機とし、21世紀の新しい国立公園にふさわしい保護・利用・管理運営のあり方とその具体化に向けて取りまとめられたものであるが、策定から10年が経過し、尾瀬を取り巻く社会情勢や自然環境が大きく変化しているため、その変化を踏まえ将来を見据えたビジョンへと改定を行う。

### (2) 改定の経過

#### ● 平成28年度

これまでの取組の成果についてとりまとめを行うとともに、より利用の視点に立った取組内容の強化を追加することを主軸に、尾瀬ビジョンの再確認を実施。

平成28年度協議会において再確認の結果(レビュー)を報告し、改定の方向性を確認。

**【改定の方向性】 ※平成28年度尾瀬国立公園協議会資料より抜粋**

(尾瀬が目指すあり方の共有)

- ・尾瀬がかかえる各種の課題に対応するために、尾瀬国立公園を中核とした、尾瀬地域、尾瀬に関わる人たちで将来の尾瀬が目指すあり方を共有する。

(構成上の課題の整理)

- ・尾瀬国立公園の管理方針を示した「管理計画」との整合性を整理
- ・ビジョンの構成をシンプルでわかりやすくし、尾瀬にかかわる人たちで共有しやすいものにする。

#### ● 平成29年度

尾瀬国立公園10周年にあわせ、関東地方環境事務所と尾瀬保護財団を事務局として、地域の関係者から丁寧に意見を伺いながら、改定作業を実施。

##### \* 尾瀬サミット2017・尾瀬国立公園10周年記念式典

尾瀬ビジョン改定における重要な意見交換の場として、3県知事や若者をはじめとした尾瀬関係者により「これからの尾瀬」について議論

##### \* 意見交換会・ヒアリング・アンケートの実施

地域住民、山小屋、民宿、事業者、観光協会、ガイド、ボランティア、利用者等

## (3) 改定のコンセプトと新尾瀬ビジョンの概要

## ＜改定のコンセプト＞

改定の留意点	<b>分かりやすい</b> * 要点をまとめ、短く * 若い世代でも分かる	<b>使える</b> * 会議等の場で 合意形成しやすくする * 外部からの支援を 訴える資料になる	<b>主体的に考える</b> * 他人事ではなく、 自分事として捉える * 自分たちに何が出来る のか明確に分かる
	現行からの変更点	☆「基本方針」を具体的に して目標を明確化  ☆コンパクトな文章と 読み易い構成	☆各種課題への取り組み の方向性について地域 の共通認識を明示 ☆人に見せながら説明し 易い構成携帯して参照 しやすいつくり

## ＜新尾瀬ビジョン（仮称）の概要＞

目的	
「みんな」の財産である尾瀬の恩恵を「みんな」が受け続けるためには「みんな」の力が必要	
↓	
尾瀬がめざす姿、行動理念、今後の方向性を共有することで、「みんな」の力を合わせる	

主体＝みんな ＝あなた	尾瀬の生きものをはじめ、すでに尾瀬と関わっている人、まだ尾瀬との関わりに気付いていない人、さらにこれから尾瀬と関わっていく人すべて
対象地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>・尾瀬を中心とするが、対象とする地域は限定しない</li> <li>・「尾瀬」を尾瀬国立公園とその周辺を合わせた広がり一帯と捉える</li> <li>・活動は「尾瀬」以外の地域でも進めていく必要</li> </ul>
期間	「あなた」や次代を担う子どもたちが約 20 年後の尾瀬にどうあってほしいか
見直し	絶えず変化する自然や社会環境を踏まえながら、見直しを実施
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 前回の「尾瀬ビジョン」の振り返り</li> <li>● 尾瀬の現状 尾瀬を取り巻く自然的・社会的環境の変化、活かしたい尾瀬の強み</li> <li>● みんなで叶える「尾瀬がめざす姿」 「生きもの」の視点、「利用者」の視点、「地域」の視点</li> <li>● 目指す姿を実現するために意識する「行動理念」 「みんなの尾瀬を みんなで守り みんなで楽しむ」</li> <li>● これからの尾瀬の「今後の方向性・必要な取り組み」</li> <li>● 新ビジョンと他の行政計画などとの関係、「みんな」の意見集</li> </ul>

## 尾瀬ビジョンの再確認と今後の進め方について

### 1. 目的

- 尾瀬ビジョンが策定されて10年が経過し、策定から現在までに社会情勢や尾瀬の自然環境、また、尾瀬における取組などが変化しているため、既存の尾瀬ビジョンのレビューを行うとともに、これまで管理者が主体となって進めてきた尾瀬の保護・管理のあり方について、より利用者の視点を取り込むとともに、今後10年及びさらに先の将来を見据えた尾瀬のあり方の指針となるような尾瀬ビジョンとなることを目指して、再確認を行う。
- なお、現行の尾瀬ビジョンは、尾瀬地域の公園計画の見直し（尾瀬国立公園の独立）や関係機関の業務の骨子となるような尾瀬の今後の方向性を示すことを目的にとりまとめられている。（経緯および概要は別紙1参照）

### 2. 現状と課題

#### 1) 尾瀬における課題

- ※尾瀬国立公園協議会構成員、及び尾瀬国立公園に携わる関係者にヒアリング及びアンケート調査から特に多く意見のあったもの。
- 自然環境の保全（シカによる植生被害）
- 施設整備（木道等の維持管理、ビジターセンター、トイレのあり方）
- 利用者へのサービスにかかること  
（通信環境の整備（携帯電話、wi-fi）、外国人への対応、情報発信）
- 新しい利用のあり方（トレイルランニング、冬山の利用） など

#### 2) ○中長期の視点が弱い

- ※人口減少にともなう利用者の減少  
（事業（山小屋経営など）の継続性、施設の維持管理への影響）、
- ※温暖化による生態系の変化など
- ※近年の新たな観光の動き（インバウンドなど）

#### 3) ビジョンの構成上の課題

- 尾瀬国立公園協議会、小委員会、尾瀬サミット等の役割分担が不明確
- ビジョンの構成が煩雑（重要なポイントがわかりにくい）
- 尾瀬国立公園協議会の役割の1つである尾瀬ビジョンの進捗状況の把握方法が煩雑



### 3. 改定の方向性

(尾瀬が目指すあり方の共有)

・尾瀬がかかえる各種の課題に対応するために、尾瀬国立公園を中核とした、尾瀬地域、尾瀬に関わる人たちで将来の尾瀬が目指すあり方を共有する。

(構成上の課題の整理)

・尾瀬国立公園の管理方針を示した「管理計画」(別紙2参照)との整合性を整理  
・ビジョンの構成をシンプルでわかりやすくし、尾瀬にかかわる人たちで共有しやすいものにする。

<尾瀬ビジョンを改定する上で検討が必要な事項(案)>

- 将来にわたり守るべき自然環境や、社会情勢に応じた利用のあり方※
- 気候変動(生態系の変化)、人口減少への対応
- 持続可能な地域経済への寄与

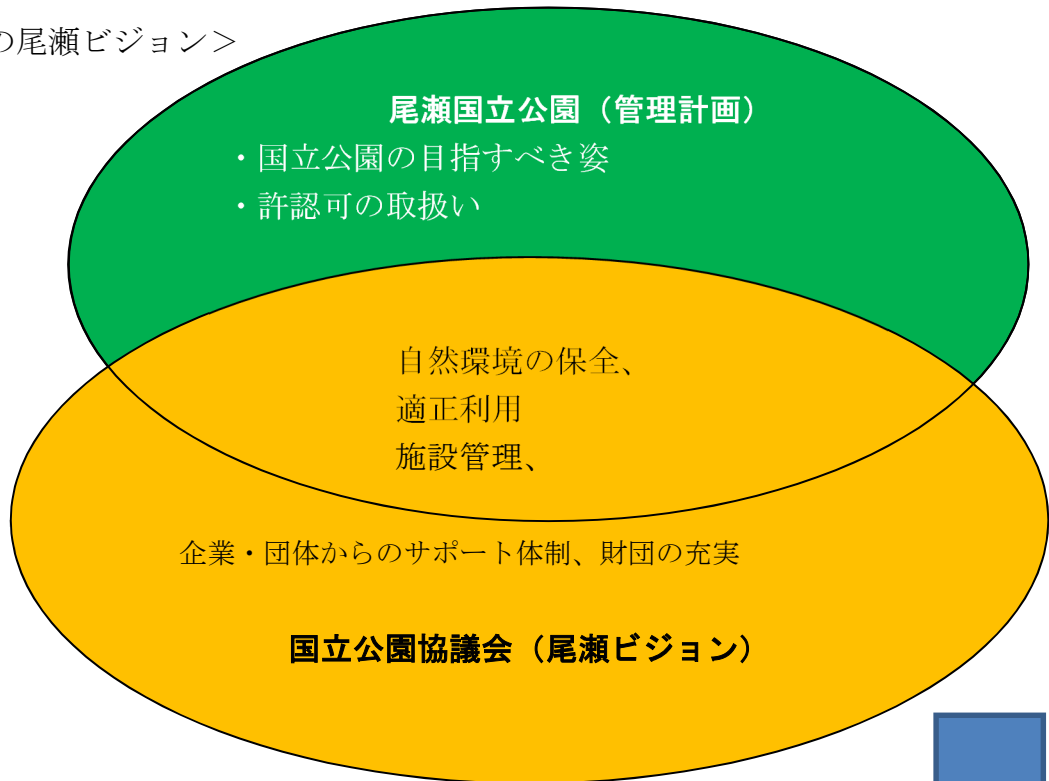
※少子高齢化、人口減少の中で尾瀬地域のみで尾瀬を保全することは限界であり、特に都市部の尾瀬に関心ある個人、企業等を対象にお金・労力をいただく一方で、そのような方々に新しい質の高い利用を提案するなど、WINWINの関係を構築する必要がある。

- 企業・団体からのサポート体制、財団の充実

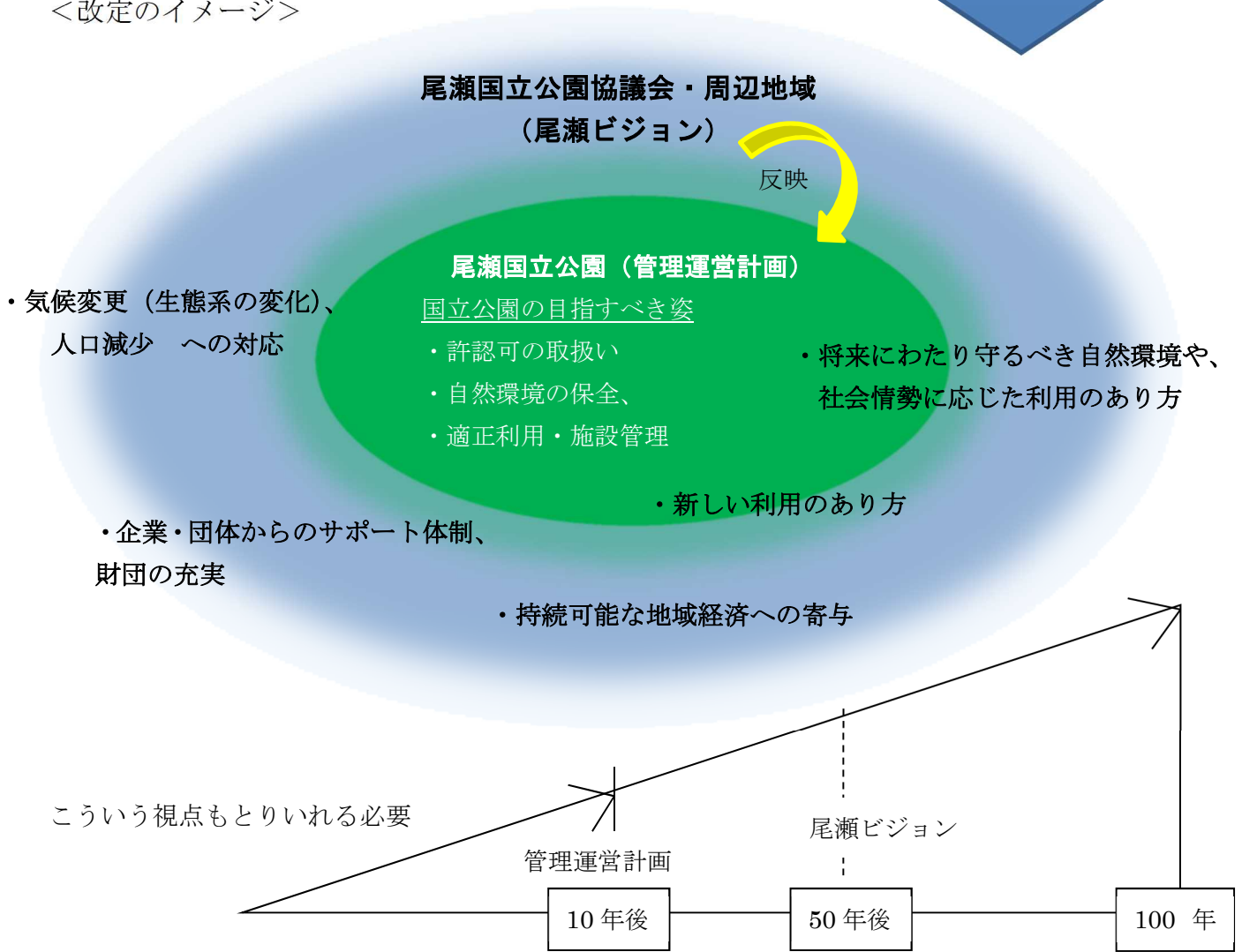
※(参考)「管理計画における尾瀬の目指すべき姿」

- 利用者に感動を与える美しい自然景観であり、山地湿原特有の動植物や貴重な高山植物、ブナの原生林等の質の高い自然環境から構成される雄大な湿原景観が、将来にわたり維持されている。
- 自然景観の保全を基本とした利用が今後も推進され、環境学習の場としての利用、山麓における自然とのふれあい活動の場としての利用等、風景鑑賞のみに留まらない体験・学習型の利用が充実している。

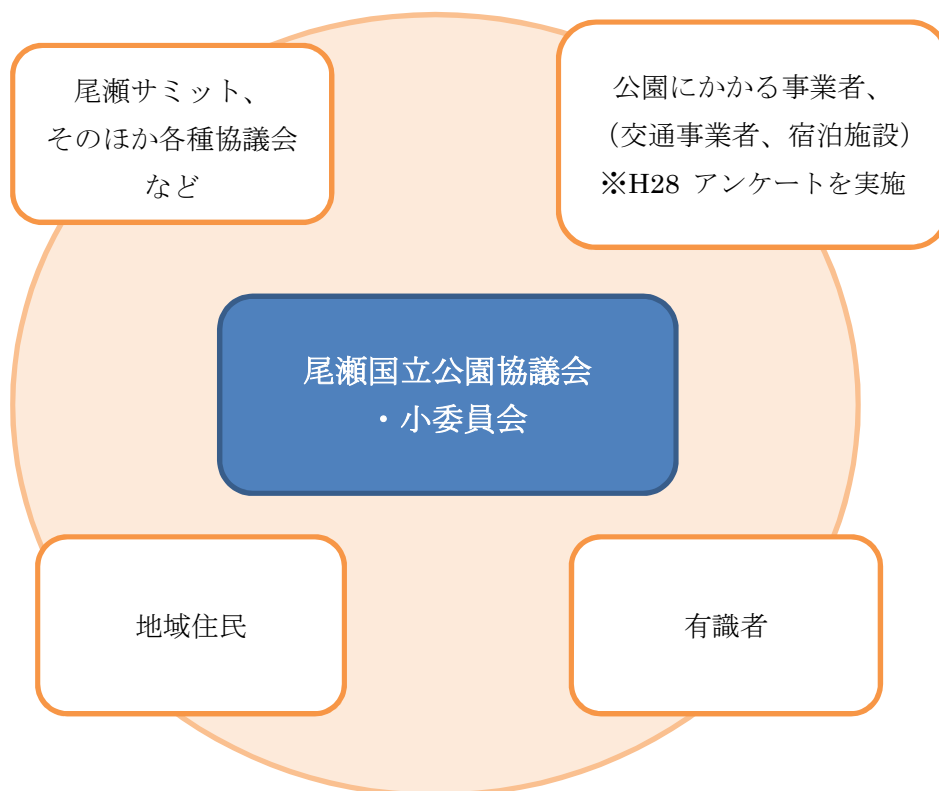
<既存の尾瀬ビジョン>



<改定のイメージ>



#### 4. 改定の進め方



#### 具体的なスケジュール (案)

H28年度	9-11月	○関係者からのヒアリング及びアンケート調査 ・現在の尾瀬及びビジョンの課題について意見聴取
	12月	○第1回小委員会 ・レビュー(案)の確認 ・課題についての情報共有・意見交換
	2月	○第2回小委員会 ・進め方についての検討・了解 ・これまでの対策レビューの確認
	3月	○尾瀬国立公園協議会 ・進め方についての検討・了解 ・これまでの対策レビューの確認
H29年度	~10月	○尾瀬サミット、地域住民との意見交換会 など
~ H30年度		○尾瀬ビジョン改訂 ○尾瀬国立公園協議会の役割の見直し
H31年度 ~		○管理運営計画の改定



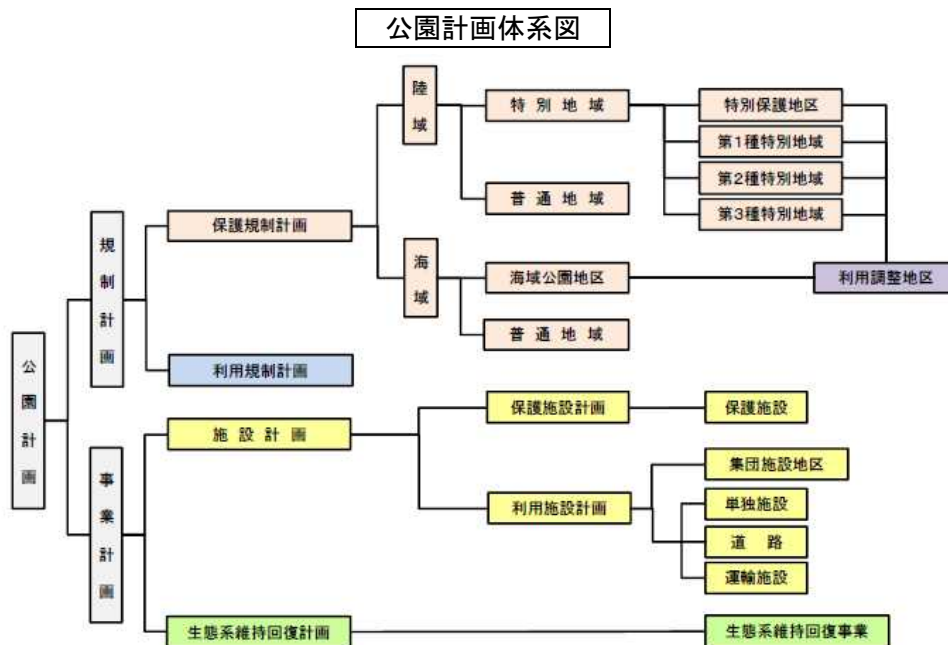
\* 国立公園制度におけるビジョン、公園計画、管理運営計画の位置づけ \*

ビジョン

- 各関係者が、主体的に国立公園の管理運営に資する取組を実施するための共通認識として共有した、国立公園の望ましい保全・利用の目標
- 風致景観及び自然環境、利用状況等の国立公園ごとの特徴を踏まえた国立公園の望ましい姿（国立公園の保護すべき資源、利用の方向性等）、国立公園が提供すべきサービス（役割）、国立公園の価値や保全・利用の目標をわかりやすく示したものの。

公園計画

- 自然公園法に基づいて環境大臣が決定する、国立公園の保護又は利用のための規制又は事業に関する計画
- 公園区域、規制計画、事業計画などを規定。



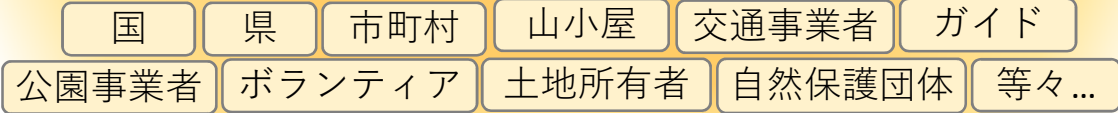
管理運営計画

- 「国立公園管理運営計画作成要領」（環境省自然環境局長通知）に基づく計画
- 地域の実情に即した国立公園管理運営業務の一層の徹底を図るとともに、地域の多様な関係者と国立公園の目指すべき姿や将来目標、国立公園の保護と利用の推進すべき方向性について共通認識を持ち、国立公園の管理運営を協働により進めていくことで、国立公園の適正な保護及び利用の推進を図ることを目的として、国立公園ごと又は国立公園の地域ごとに、各地方環境事務所長が作成
- 管理運営計画の内容として、国立公園における保護の課題、国立公園が提供すべきサービス等について総合的に議論する協議会において決定した「ビジョン」を記載することとされている。（尾瀬においては尾瀬国立公園協議会でビジョンを策定）

# 新ビジョンと他の行政計画などとの関係

H30.3.8.ver

## 地域の各主体による具体的な取り組み



目指す・意識する

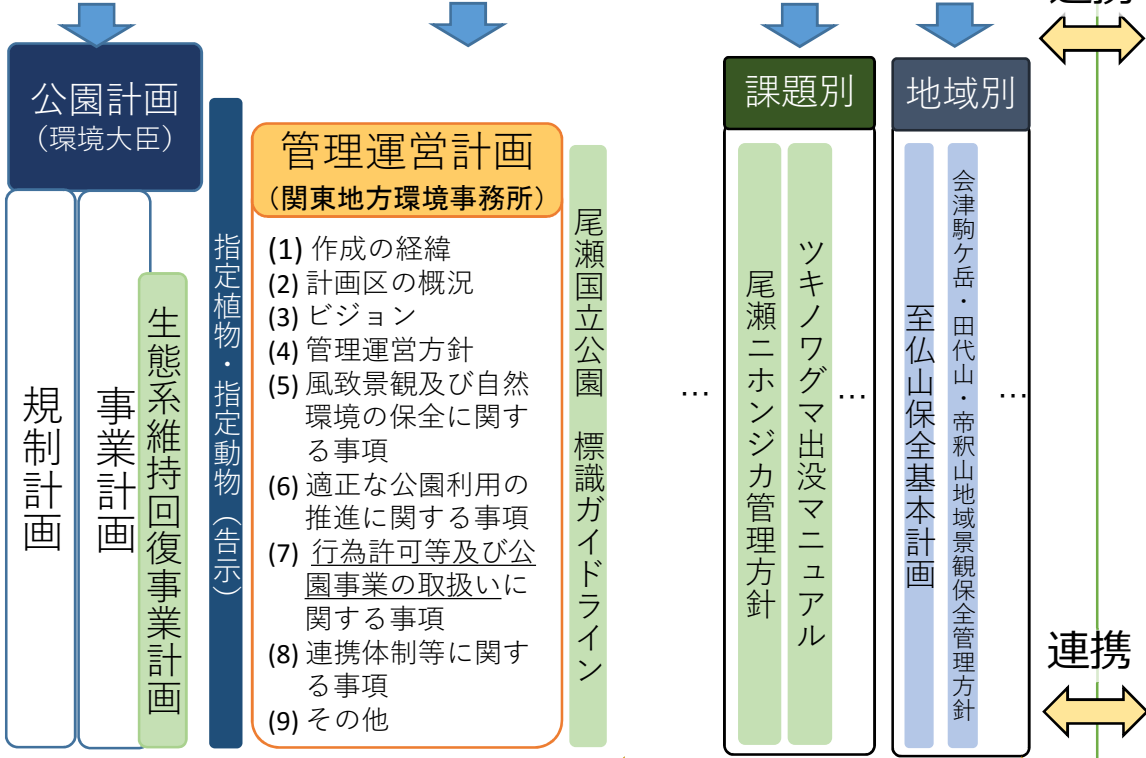
## 新尾瀬ビジョン (仮称)

対象：尾瀬国立公園とその周辺を中心とするが、地域は限定せず、「尾瀬」以外でも活動を実施

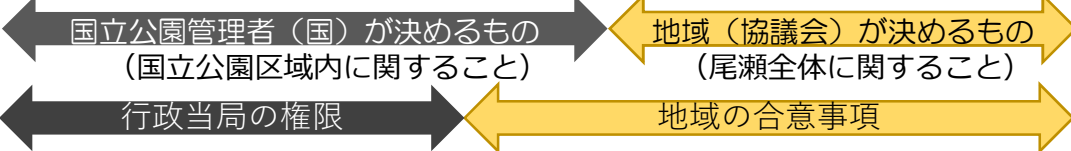
全体的  
長期的  
理念的

- 前回の「尾瀬ビジョン」の振り返り
- 尾瀬の現状  
…尾瀬を取り巻く自然的・社会的環境の変化、活かしたい尾瀬の強み
- みんなで叶える「尾瀬がめざす姿」  
…「生きもの」の視点、「利用者」の視点、「地域」の視点
- 目指す姿を実現するために意識する「行動理念」
- これからの尾瀬の「今後の方向性・必要な取り組み」

## 「みんなの尾瀬を みんなで守り みんなで楽しむ」



個別的  
短期的  
具体的



尾瀬を対象範囲に含む行政分野 / 行政区域別の各種計画 (国・県・市町村等)

環自国発第 1407074 号  
平成 26 年 7 月 7 日

都道府県自然公園担当部局長 殿

環境省自然環境局  
国立公園課長

「国立公園管理運営計画作成要領」について

国立公園の管理においては、近年、外来種や野生鳥獣による被害等の新たな課題への能動的な対応、利用者ニーズの変化を踏まえ、地域振興に配慮した適切な利用の推進及び地域の観光や土地利用に関する計画・施策との整合性の確保が求められており、これらの課題等への長期的かつ戦略的な取組の推進について助言を得るため、平成 23 年度より有識者から成る「国立公園における協働型運営体制のあり方検討会（座長：東京大学下村教授）」を設置し、「国立公園における協働型管理運営を進めるための提言」（平成 26 年 3 月 20 日）がとりまとめられました。当該提言を受け、国立公園においては、下記のとおり地域の関係者との協働による管理運営を推進していくこととしました。

これに伴い、今般、「国立公園管理計画作成要領」（平成 18 年 4 月 20 日環自国発第 060420001 号）を廃止し、「国立公園管理運営計画作成要領」を新たに別添のとおり定めたので、参考として送付します。

記

- 1 地域の関係者との協働による管理運営\*の取組を進めるに当たっては、次の事項に留意し、順次可能な地域から取組を進めること。
  - ・各国立公園の全体又は地理的・社会的若しくは利用上まとまりを持った一定の地域において、国立公園の価値や保全・利用の目標を示したビジョン、そのビジョンを実現するための管理運営の方針及び自然環境の保全や適正な利用の推進に係る地域ルール\*\*について、環境省及び地域の関係者が共有する。
  - ・これらのビジョン、管理運営方針等に基づき、自然環境の保全、利用施設の整備及び維持管理、利用者サービスの提供等の地域の関係者が分担して実施すべき具体的な取組内容及び役割分担について整理した行動計画を作成する。
- 2 国立公園における保護の課題や提供すべきサービス等について総合的に検討し、上記 1 の国立公園におけるビジョン、管理運営方針、行動計画及び地域ルールを決定し、そ

の実現に向けた取組の進捗管理等を行う組織として、関係者が参画する常設の協議会（以下「総合型協議会」という。）を設置すること。世界自然遺産地域における地域連絡会議等の既存の枠組みが、総合型協議会としての役割を担える場合は、これを活用することができる。また、環境省を含む総合型協議会の構成員は、国立公園のビジョン等の当該協議会における決定事項に最大限配慮しつつ、行動計画に沿った取組を進めていくための計画づくりや具体的な施策を実施していく。

- 3 総合型協議会における決定事項については、地方環境事務所長が作成する国立公園管理運営計画に次のとおり位置付け、その整合性及び実現性を担保すること。具体的には、別途定める「国立公園管理運営計画作成要領」に沿ったものとする。
- ・総合型協議会で決定された国立公園のビジョン、管理運営方針及び地域ルールについては、国立公園管理運営計画の一部として位置付ける。
  - ・国立公園管理運営計画には、総合型協議会で決定され、行動計画に定められた環境省を含む各主体の取組について記載する。

なお、今後、これらの具体的な内容や進め方をまとめた「国立公園における協働型管理運営を進めるための手引書」を作成する予定としている。

\* 「地域の関係者との協働による管理運営」とは、関係者が国立公園の望ましい保全・利用の目標（ビジョン）、当該国立公園の管理運営のあり方等を共有し、その共通認識に基づき、各関係者が主体的に国立公園の管理運営に資する取組を実施することをいう。

\*\* 「地域ルール」とは、国立公園の全部又は一部の地域において、自然環境や利用状況を踏まえて定める地域特有の自然環境保全及び適正利用の推進のための自主的なルールや遵守事項のことをいう。

環自国発第 1407074 号  
平成 26 年 7 月 7 日

地方環境事務所長 殿  
釧路、長野及び那覇自然環境事務所長 殿

自 然 環 境 局 長  
( 公 印 省 略 )

「国立公園管理運営計画作成要領」について

今般、「国立公園における協働型管理運営の推進について」（平成 26 年 7 月 7 日環自国発第 1407073 号）の通知の発出に伴い、「国立公園管理運営計画作成要領」を別添のとおり定めたので通知する。

なお、「国立公園管理計画作成要領」（平成 18 年 4 月 20 日環自国発第 060420001 号）は廃止する。また、今後、現行の「国立公園管理計画」は「国立公園管理運営計画」とみなし、関連通知等における「国立公園管理計画」は「国立公園管理運営計画」と読み替えてこれを運用するものとする。

## 国立公園管理運営計画作成要領

### 第1 目的

国立公園管理運営計画（以下「管理運営計画」という。）は、地域の実情に即した国立公園管理運営業務の一層の徹底を図るとともに、地域の多様な関係者と国立公園の目指すべき姿や将来目標、国立公園の保護と利用の推進すべき方向性について共通認識を持ち、国立公園の管理運営を協働により進めていくことで、国立公園の適正な保護及び利用の推進を図ることを目的として作成するものとする。

### 第2 管理運営計画の作成対象地域

管理運営計画の作成対象地域（以下「管理運営計画区」という。）は、一体性の高い国立公園の場合は国立公園全域又は地理的区分としての地域ごとに作成するものとするが、風致景観の特性（一体性又は類似性）及び社会的特性（地域の連携体制、利用の形態等）により、国立公園を複数の地区に区分する場合は、その地区ごとに作成し得るものとする。

### 第3 管理運営計画の内容

管理運営計画においては、原則として次に掲げる事項を定めるものとする。

#### (1) 管理運営計画作成の経緯

管理運営計画の作成又は変更の経緯及びその要点を記載する。

#### (2) 管理運営計画区の概況

管理運営計画区を構成する風致景観及び自然環境の概況、利用の概況、公園計画（規制計画及び施設計画）の概況を記載する。

#### (3) ビジョン

管理運営計画区の風致景観及び自然環境、利用状況等の国立公園ごとの特徴を踏まえた国立公園の望ましい姿（国立公園の保護すべき資源、利用の方向性等）、国立公園が提供すべきサービス（役割）、国立公園の価値や保全・利用の目標をわかりやすく示したものを記載する。国立公園を中核とする地域の関係者によって構成され、国立公園における保護の課題、国立公園が提供すべきサービス等について総合的に議論する協議会（以下「総合型協議会」という。）において決定した内容を記載する。

#### (4) 管理運営方針

上記（3）の国立公園のビジョンを実現するために、環境省や地域の国立公園関係者が、国立公園を管理運営していくに当たっての方向性を示したものであり、総合型協議会において決定した内容を記載する。

#### (5) 風致景観及び自然環境の保全に関する事項

管理運営計画区において保全すべき風致景観及び自然環境を整理の上、それぞれの保全方針を記載する。また、当該方針に従い、保全のための指導事項、遵守事項及び

地域ルール並びに環境省としての風致景観及び自然環境の保全に関して取り組むべき事項とともに、総合型協議会において決定し、行動計画に位置付けられた環境省を含む各主体の取組について記載する。

#### (6) 適正な公園利用の推進に関する事項

管理運営計画区において風致景観及び自然環境の希少性や脆弱性、地形的要素、アクセス条件等を整理の上、当該地域の利用方針を記載する。なお、利用方針を整理する際には、上記の整理に従いエリア分けした上で、エリアごとに利用方針を示すこともあり得る。また、当該方針に従い、適正利用のための指導事項、遵守事項及び地域ルール並びに環境省として適正な公園利用の推進に関して取り組むべき事項とともに、総合型協議会において決定し、行動計画に位置付けられた環境省を含む各主体の取組について記載する。

#### (7) 公園事業及び行為許可等の取扱いに関する事項

##### (公園事業取扱方針)

公園事業について、事業決定の内容及び「国立公園事業取扱要領」（平成 22 年 4 月 1 日環自国発第 100401003 号）によるほか、事業者等を指導する取扱方針を定める。

##### (許可、届出等取扱方針)

国立公園内における各種行為について、自然公園法の行為許可申請に対する審査基準として、「国立公園の許可、届出等の取扱要領」（平成 17 年 10 月 3 日環自国発第 051003001 号）及び「自然公園法の行為の許可基準の細部解釈及び運用方法について」（平成 12 年 8 月 7 日環自計第 171 号・環自国第 448-1 号）において定める基準の細部解釈によるほか、事業者等を指導する取扱方針を定める。

#### (8) 国立公園関係者の連携体制等に関する事項

総合型協議会の開催、情報共有体制等、管理運営計画の運用その他の新たな課題への対応を行っていくための、地域の国立公園関係者との連携体制等について記載する。

#### (9) その他及び参考資料

上記（1）～（8）のほか、国立公園の管理運営において必要な事項について定める。また、参考資料として、管理運営計画とは別に定められた当該地区における各種許認可に係る通知、行為の許可基準の特例、指定動植物一覧等の国立公園の管理運営を行っていく上で必要な資料を添付し、国立公園関係者と情報共有を図ることとする。

### 第 4 管理運営計画の作成手続

- 1 管理運営計画（管理運営計画に係る特定事項を含む。）は、地方環境事務所長（釧路自然環境事務所長、長野自然環境事務所長及び那覇自然環境事務所長を含む。以下同じ）が、原則として総合型協議会又はその分科会等を活用して作成（変更する場合も含む。以下同じ）するものとする。

なお、管理運営計画の変更は、総合型協議会におけるビジョン等の決定を受け、公

園計画の見直しの機会に実施することを基本とするが、部分的な変更については、総合型協議会の設置状況や公園計画の見直し状況等の地域の実情を踏まえ、必要に応じてこれによらずに随時実施することができるものとする。

- 2 地方環境事務所長は管理運営計画の作成に当たっては、関係者の意見を十分聴取するとともに、その作成状況について随時情報共有に努めることとする。また、行政手続法第6章の規定による意見公募手続により広く一般から意見を募集するものとする。  
ただし、第3の(7)に掲げる事項に関係しない軽微な変更等であって、関係者の意見聴取や一般からの意見公募手続の必要がないと地方環境事務所長が判断した場合はこれらを省略できる。
- 3 管理運営計画に記載する事項のうち、第3の(7)に掲げる事項の作成に当たっては、法定受託事務実施都県の了承を得るものとする。
- 4 地方環境事務所長は、管理運営計画に記載する事項のうち第3の(7)に掲げる事項の案については、あらかじめ自然環境局長と協議しなければならない。自然環境局長は、地方環境事務所長から案の協議を受けたときには、原則として2か月以内に同意の可否について回答するものとする。
- 5 地方環境事務所長は、管理運営計画の作成に当たっては、必要に応じ第3の(7)に掲げる事項以外の事項についても、自然環境局長の意見を聴くことができる。

## 第5 管理運営計画作成国立公園の指定

地方環境事務所長は、自然環境局長の意見を聴いて、毎年度当初、当該年度において管理運営計画を作成する国立公園を指定するものとする。

## 第6 報告及び公表

地方環境事務所長は、管理運営計画を作成した際には、管理運営計画書としてとりまとめ、自然環境局長に報告し、また、これを公表するものとする。

## 第7 管理運営計画の運用

地方環境事務所長は、管理運営計画を作成した際には、総合型協議会に報告し、情報共有を図るとともに、総合型協議会において当該計画の運用状況について共有を図っていくものとする。

なお、第4の4の協議による同意を得て地方環境事務所長が管理運営計画を作成した場合、第3の(4)及び(7)に掲げる事項については、地方環境事務所長の権限の行使に加え、環境大臣の権限の行使に関してもこれを準用するものとする。



H30.3.8.時点事務局案

**新尾瀬ビジョン（仮称）**

尾瀬が目指す姿を象徴するような写真またはイラスト

※H30年に検討予定

**平成 30 年 月 日**  
**尾瀬国立公園協議会**

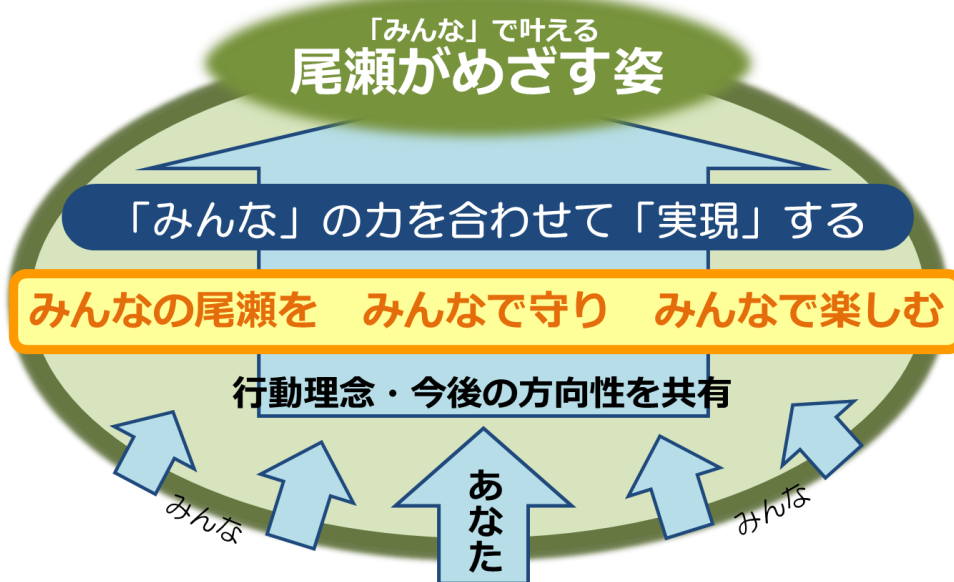
## 「新尾瀬ビジョン」とは

### 「みんな」で叶える「あなた」の尾瀬

尾瀬は「あなた」をはじめ「みんな」の財産です。そして、「あなた」がこれからも尾瀬の恩恵を受け続けるためには「みんな」の力が必要です。

「あなた」も「みんな」の一人になって、「尾瀬がめざす姿」を実現させる力になりませんか？その助けとなるように、「新尾瀬ビジョン」(以下、新ビジョンという。)は作られています。

Ver.H30.1.15.



### 【「みんな」って誰のこと？】

「みんな」とは、尾瀬の生きものをはじめ、すでに尾瀬と関わっている人、まだ尾瀬との関わりに気付いていない人、さらにこれから尾瀬と関わっていく人すべてのことです。つまり、「みんな」には「あなた」も含まれています。

### 【新ビジョンで対象とする地域は？】

尾瀬を中心としていますが、対象とする地域は限定していません。

新ビジョンでは「尾瀬」を尾瀬国立公園とその周辺を合わせた広がり一帯と考えており、さらに自然を守る想いの普及啓発や魅力の発信、尾瀬を守る活動などは、「尾瀬」以外の地域でも進めていく必要があります。

### 【「めざす姿」ってどういうこと？】

「尾瀬がめざす姿」は、あなたや次代を担う子どもたちが約20年後の尾瀬にどうあってほしいかということを考えて書かれています。

先人たちが守ってきた「みんな」の財産である尾瀬を「あなた」も「みんな」の一人として引き継ぎ、「めざす姿」の実現に向けて取り組んでいきましょう。

### 【新ビジョンに書かれていることは？】

○新ビジョンには次のことがまとめられています（該当ページ）。

- 前回の「尾瀬ビジョン」の振り返り (○-○P)
- 尾瀬の現状 (○-○P)  
…尾瀬を取り巻く自然的・社会的環境の変化、活かしたい尾瀬の強み
- みんなで叶える「尾瀬がめざす姿」 (○-○P)
- めざす姿を実現するために意識する「行動理念」 (○-○P)
- 尾瀬の「今後の方向性・必要な取り組み」 (○-○P)

○新ビジョンの最後に次のことをまとめています。

- 新ビジョンと他の行政計画などとの関係
- 新ビジョンをつくる際に集められた「みんな」の意見集

### 【新ビジョンの見直しは？】

自然や社会環境は絶えず変化しているため、新ビジョンに書かれていることは、こうした変化を踏まえながら見直していきます。

#### 「尾瀬」と前回の「尾瀬ビジョン」

美しい景観とともに貴重な生態系を有する「自然の宝庫」尾瀬は、過去において数多くの開発の波にさらされましたが、そのたびに、先人たちの懸命な努力により守られてきました。

2006年11月30日、「尾瀬」の現況や課題を受け、今後の尾瀬のあり方を示す「尾瀬ビジョン」がつけられました。多様な主体からなる「尾瀬の保護と利用のあり方検討会」が、これからの尾瀬の進むべき方向について検討し、21世紀の新しい国立公園にふさわしい保護・利用・管理運営のあり方とその具体化に向けてつくられたものです。このビジョンで示された取り組みの結果、2007年8月30日に「尾瀬国立公園」は日光国立公園から分離・独立しました。

その後、10年が経過し、尾瀬を取り巻く自然環境や社会も大きく変化していることから、様々な変化を踏まえ、将来を見据えた「新ビジョン」として改定を行いました。

## 前回の「尾瀬ビジョン」の振り返り

### 1. 「尾瀬」地域の見直しについて

#### できたこと

○平成 19 年 8 月 30 日に日光国立公園から分離・独立し、会津駒ヶ岳、田代山、帝釈山などが加わって新たに尾瀬国立公園となりました。

#### これから必要なこと

●必要に応じて公園計画の見直しを行います。

### 2. 保護について

#### できたこと

○研究者などによって、長年各分野の調査研究が進められています。

○20 年ぶりに第 4 次尾瀬総合学術調査が始まりました（平成 29 年～）。

○ニホンジカ対策を目的とした尾瀬国立公園シカ対策協議会が組織され、平成 12 年に策定、平成 21 年に改定された「尾瀬国立公園シカ管理方針」に基づき、関係機関が連携しながら調査研究や捕獲などの対策が進められています（平成 13 年～）。

○ツキノワグマとの共存を目指した「ツキノワグマ対策マニュアル」が作られ、事故の防止対策や利用者への普及啓発が行われています（平成 21 年～）。

○関係機関やボランティアが連携し、過去のごみ問題や荒廃した植生の回復対策が進められるなど、尾瀬を守るための活動が続けられています。

#### これから必要なこと

●尾瀬をより良くするためには何を調べる必要があるのかを明確にし、その成果を公園管理にどのように活かしていくのかを考えることが必要です。

●ニホンジカの影響は低減できておらず、抜本的な対策が求められています。

●ツキノワグマの目撃が増加しており、共存に向けた取り組みが求められます。

●イノシシやサルの分布の拡大が指摘されており、尾瀬に影響が及ばないように注視していく必要があります。

●尾瀬を守るための活動については、各対策の目標を明確にしながら、取り組みを進めていくことが必要です。

### 3. 利用について

#### できたこと

○鳩待峠からの利用分散を目的に大清水～一ノ瀬間において低公害車の営業運行が始まりました（平成 27 年～）。

○外国人旅行者の増加を踏まえ、標識のサイン統一化や設置する際のガイドラインがつけられました（平成 28 年～）。

○静かな入山口を目指し鳩待峠駐車場の再整備が行われました（平成 28 年～）。

○関係自治体などにおいて、尾瀬をフィールドとした環境教育が行われ、多くの子どもたちが尾瀬で学んでいます。

○尾瀬ガイド協会が設立され、ガイド付きの環境学習やエコツアーリズムが推進されています（平成 20 年～）。

#### これから必要なこと

●さらに利用の分散を進めるため、尾瀬が持つ多様な魅力や滞在型・周遊型の利用を推進する必要があります。

●外国人旅行者や軽装での入山者の増加を踏まえ、インターネットや入山口での入山前の情報発信の必要性が高まっています。

●エコツアーリズムの推進はもちろん、ガイドの高齢化や外国人旅行者に対応できる新たな担い手の養成が求められています。

### 4. 管理運営体制について

#### できたこと

○尾瀬国立公園協議会が設置され、多様な主体が参加して尾瀬国立公園の管理運営が行われています（平成 20 年～）。

○尾瀬サミットで、関係機関のトップが集まって尾瀬のあらゆることを話し合われています（平成 4 年～）。

○救助体制に基づき山小屋やビジターセンターが遭難救助の重要な役割を担っています。また、尾瀬国立公園の各地区に A E D を設置するなど、利用者の安全確保のために取り組みが進められています。

○登山道の整備に必要な資金的サポートを受ける取り組みが始まりました（平成 29 年～）。

#### これから必要なこと

●既存の仕組みを見直しながら、関係機関だけでなく、利用者や地域の担い手など様々な人が、活発な意見交換をできる機会をつくる必要があります。

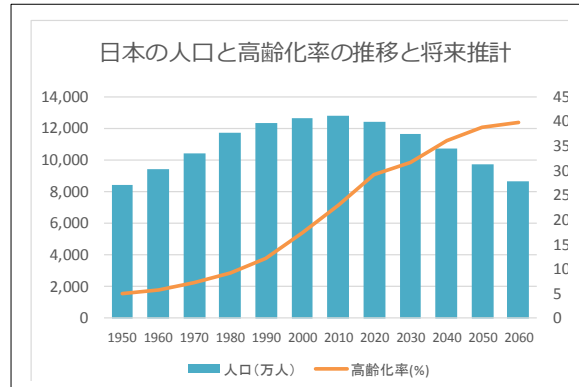
●これからも尾瀬を守り続けるため、利用者などからのより一層の資金的・人的サポートが求められています。

## 尾瀬の現状

### 1. 尾瀬を取り巻く自然的・社会的環境の変化

#### (1) 少子高齢化・人口減少による影響

- ・本格的な人口減少社会の到来により、2050年には日本の人口は1億人を割り込むと予想され、高齢者の割合は、2050年には40%弱まで上昇する見込みとなっています\*1出典。
- ・さらに、都市への人口集中により、尾瀬の関係自治体においても少子高齢化・人口減少が進んでおり、過疎化や産業の衰退が懸念されています。

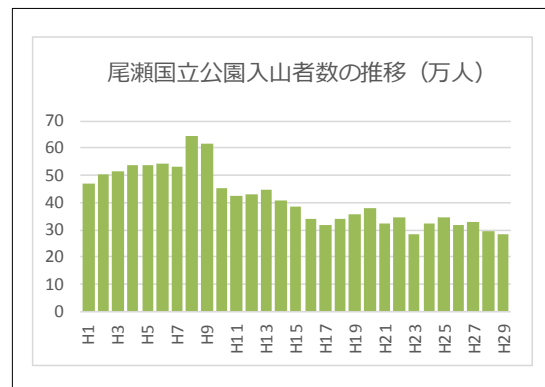


#### (2) ライフスタイルの変化とレジャーの多様化

- ・価値観やライフスタイルの変化により旅行形態は団体から個人に変化し、インターネットによって情報の入手が容易になったことで、個人の好みや興味・関心に合わせた取り組みが求められるなど観光地間の競争は厳しくなっています。
- ・都市化とデジタル化が進む社会の中で自然と触れ合う時間が減少し、さらにレジャーも多様化したことで「山離れ」も進んでいます。

#### (3) 尾瀬国立公園入山者数の変化

- ・尾瀬国立公園の入山者数は、平成8年の約65万人をピークに減少し、平成28年度には震災以降初めて30万人を下回り、平成29年度も28万人となっています\*2出典。また、日帰り利用の増加や年齢層の高齢化が指摘されています。



#### (3) 外国人旅行者の増加

- ・日本は、観光業を基幹産業として位置付けており、2020年に外国人旅行者を4,000万人にすることを目標としています。また、環境省も国立公園における外国人旅行者を2020年までに2015年の2倍以上の1,000万人に増やすことを目標にしています\*3出典。
- ・こうした流れから、尾瀬においても外国人旅行者の増加が予想されます。

#### (4) 気候変動による自然生態系への影響

- ・人間の活動によって温室効果ガスが増えたことによる気候変動の結果、気温が上がる、雪の降る量が減る、大雨が増える、生物種の減少や分布域の変化といった影響が危惧されています。
- ・尾瀬のように寒冷な気候下で成立した自然環境では、気候変動の影響を大きく受けることが危惧されており、湿原の乾燥化や植物の分布域の縮小、種構成の変化などが考えられます。また、大雨に伴う土砂の流出により、登山道の荒廃やアクセスルートの遮断につながることも危惧されています。

#### (5) ニホンジカによる影響

- ・日本ではニホンジカの生息数が急速に増加し、自然景観や植生の消失、表土の流出、希少種の減少などが全国で問題となっています。増えた理由には、雪の降る量が減少したことに加え、耕作放棄地の増加、狩猟者の減少といった人間の営みの変化も大きく影響していると言われています。
- ・尾瀬はニホンジカの影響を受けずに成立した生態系であると考えられていますが、1990年代中頃から生息が確認され、食害や掘り起こしによる湿原の裸地化が問題になりました。関係機関による捕獲などが進められていますが、影響は継続して認められており、このまま影響を受け続けた場合、尾瀬本来の生態系・植生の消失が懸念され、国立公園としての質や観光資源としての魅力の低下にもつながります。



高山植物を採食するニホンジカ



裸地化した湿原

#### (6) 公園管理者などの財政状況の悪化

- ・少子高齢化や人口減少により、公園管理者などの財政状況は厳しくなっています。例えば環境省の予算のうち施設整備などに充てられる事業費は平成13年度をピークに減少しており、平成29年度はピーク時の約半分となっています。現状のままでは、今後も行政機関の事業費は減少していくと予想されます。
- ・尾瀬の植生を守るために整備されている木道は全長約65kmあり、全体で毎年数億円規模の整備費が必要ですが、現在の整備レベルを維持するための十分な財源の確保が困難となっています。

- ・尾瀬国立公園の入山者数の減少により、働く人々の財政状況も厳しいものになっています。特に、入山者数に比例して宿泊者数も減少しており、宿泊業を営む人々の経営状態は厳しいものとなっています。

## 2. 活かしたい尾瀬の強み

### (1) 歴史・伝統・文化の魅力

- ・尾瀬には、長い歴史の中で息づいてきた伝統・文化が多くあります。
- ・魚沼市には、平安時代に湯之谷村で最期をとげたと言われる尾瀬中納言三郎の立像があり、昔から尾瀬との関わりがあったことがうかがえます。
- ・福島県檜枝岐村と群馬県片品村は、尾瀬を挟んで旅人が行き交う会津沼田街道の途中にあり、江戸時代には米や酒などの物資を運ぶ交易路となっていました。また、戊辰戦争の際に会津軍が築いた土塁跡が大江湿原に今も残っており、片品村戸倉には、会津軍と新政府軍が交戦した記録が残されています。
- ・この他にも、尾瀬と結びついた歴史・伝統・文化に基づくストーリー（独自の神話、地名の由来など）が数多くあり、これらは今後磨き上げて発信していきたい尾瀬の魅力となっています。



馬で荷物を運ぶ

### (2) 尾瀬が持つ普遍の価値

- ・さらに、雄大で豊かな自然が残る尾瀬は、見る人に美しさや心地よさ、くつろぎを感じさせてくれるなど、「みんな」に価値のあるものとなっています。
- ・尾瀬は、寒冷な気温と豊かな降水量によって、変化に富んだ山岳地形がつくられ、川や森、湿原など豊かな自然が育まれてきた地域です。
- ・長い年月をかけてつくられた湿原の泥炭は、過去の気候変化や火山活動状況が保存記録されているなど、自然の博物館としても貴重な存在です。また、特に価値が高いものとして特別天然記念物にも指定されています。
- ・平成 17 年には、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約（ラムサール条約）」に登録されるなど、様々な生きものが織りなす生態系も価値あるものとなっています。

### (3) 自然保護の原点

- ・尾瀬はこれまで、度重なる開発の波にさらされてきました。
- ・明治 36 年に尾瀬にダムを建設する計画が初めて発表されてから、水力発電を進



める国策と尾瀬の保存を求める考えの間で、長期にわたる議論がありました。昭和 23 年に尾瀬ヶ原全体をダム化する計画が持ち上がると、昭和 24 年に学者・文化人・登山家たちが、「尾瀬保存期成同盟」（今の「日本自然保護協会」）を結成し、日本の自然保護運動の先駆けとなりました。

- ・尾瀬周辺の道路についても、昭和 15 年に日光国立公園利用計画に会津沼田街道の車道化が位置付けられてから議論がありました。

計画変更を経て、福島・群馬の両県による工事が進められましたが、全国的に自然保護の世論が高まり、尾瀬では昭和 46 年に平野長靖氏が環境庁（当時）長官に訴え、また「尾瀬の自然を守る会」が結成されるなどして道路計画の中止につながりました。

- ・このように、今でも美しい尾瀬の魅力を私たちが感じることができるのは、先人たちの想いと取り組みがあったからです。



工事が中止になった道路（石清水付近）

#### （４）ごみ持ち帰り運動発祥の地

- ・昭和 47 年に、山小屋組合などの関係機関、登山者や国立公園協会の提案によって環境省・地元 3 県・関係機関による「ごみ持ち帰り運動」が始まり、30 年以上もごみ持ち帰りの呼びかけが地道に行われています。
- ・尾瀬に関わる人々の協力と努力によって、一時期はごみであふれていた尾瀬も、今は美しい自然を保っています。



企業と連携したごみ持ち帰りの呼びかけ

#### （５）多様な主体が参加できる「仕組み」の存在

- ・国立公園では、優れた自然風景を後世まで残していくこと（保護）と、様々な人がその素晴らしさを楽しむこと（適正な利用）のバランスをとっていくことが必要であり、そのためには地域住民や利用者、土地所有者、行政機関、自然保護団体などの多様な主体が一体となって取り組む「仕組み」が必要です。
- ・尾瀬ではその一例としての「場」が先進的に作られており、関係者が一堂に会し、尾瀬のあらゆることについて話し合う「尾瀬サミット」が毎年開催されています。



尾瀬サミット 2017

これほど多くの関係者が集まって地域のことを話し合う事例は日本にはほとんどありません。また、平成20年には「尾瀬国立公園協議会」が開催されるなど、全国に先駆けて多様な主体による国立公園の管理運営が進められてきました。

#### (6) 一級 of 自然の中で歩き、学び、宿泊できる特別感

- ・国立公園では、保護と適正な利用のバランスをとるために一定の行為が規制されており、規制の強い順に特別保護地区、特別地域、普通地域に区分されています。
- ・尾瀬国立公園の中心部は、特別保護地区であり、特に優れた自然風景や生態系を有している場所です。それでありながら歩道や山小屋が整備されていることで、優れた自然の中を歩くだけでなく、環境学習のフィールドとして利用できています。さらに、宿泊することで朝もや、白い虹、夕焼け、星空、ホタルなどを味わうことができる特別な魅力を持っています。

環境学習の写真

宿泊するからこそ味わうことのできるものの写真

#### (7) 受け入れられる利用者層の広さ

- ・尾瀬国立公園は、2千メートル級の山々の登山を楽しめる場所でありながら、中心部は木道が整備されており、様々な世代が楽しめる場所になっています。また、首都圏に比較的近く様々な登山口やルートが存在するだけでなく、歴史・伝統・文化の魅力も有していることで、幅広い利用者層を受け入れられる可能性があるのが特徴であり、利用者はニーズ、体力に合わせて多様な楽しみ方ができます。

親子で尾瀬にきている写真

地域外の人に関われることが分かるような写真

## 尾瀬がめざす姿

みんなの財産である尾瀬をこれからも守り続けていくため、活かしたい尾瀬の強みを高めながら、以下3つの視点を大切にみんなに愛される尾瀬を目指しましょう。

### 1. 「生きもの」の視点

生きものと人がのびのびと共生する尾瀬

### 2. 「利用者」の視点

いつ来ても楽しく誰もがわくわくする尾瀬

### 3. 「地域」の視点

尾瀬に誇りを持って人々がいきいきできる

## 行動理念

尾瀬のめざす姿を実現するため、以下の行動理念に基づき行動しましょう。

**「みんなの尾瀬を みんなで守り みんなで楽しむ」**

### 1. みんなの尾瀬

尾瀬を愛するみんなで力を合わせ、みんなの共通の財産である尾瀬を次代にしっかり引き継ぐ仕組みを作っていきましょう。

### 2. みんなで守る

尾瀬が持つ普遍の価値や歴史・伝統・文化をみんなで共有し、かけがえのない尾瀬を守り育てていきましょう。

### 3. みんなで楽しむ

尾瀬のあふれる魅力をみんなで磨き上げ、自然を損なわない、多様な楽しみ方を互いに提案していきましょう。

## 1. 「みんなの尾瀬」について

尾瀬を愛するみんなで力を合わせ、みんなの共通の財産である尾瀬を次代にしっかり引き継ぐ仕組みを作っていきましょう。

### 【今後の方向性・必要な取り組み】

#### **視点① 愛される尾瀬づくり**

##### ■尾瀬のファンづくり

尾瀬のサポーターを増やすため、尾瀬に愛着を持ってくれる人を増やします。

- ・利用者の満足度向上
- ・リピーターの獲得 など

##### ■多様な利用者の受け入れ

地域における利用のあり方を考えながら、訪れた誰もが素晴らしさと快適さを感じられる尾瀬にします。

- ・新たな利用者の獲得
- ・外国人も利用しやすい尾瀬のあり方の検討
- ・障害者をはじめ様々な人のニーズへの対応 など

#### **視点② モデルとなる尾瀬づくり**

##### ■これまでの取り組みの継承

先人たちの想いと取り組みによって築かれてきた「自然保護運動の原点」としての尾瀬を次代に引き継いでいきます。

- ・これまでの取り組みの継続と改善
- ・尾瀬における自然保護の歴史の継承 など

##### ■先進的な取り組みの推進

これからも、尾瀬が自然との共生を目指すトップランナーであり、全国のモデルであり続けられるような取り組みを進めます。

- ・地球環境に配慮した取り組みの推進
- ・全国的な共通課題に対する解決策の模索
- ・他地域の成功事例の収集や応用 など

#### **視点③ 尾瀬を育てる仕組みづくり**

##### ■多様な主体の参加と連携促進

利用者や地域住民をはじめ様々な人々が一丸となることで、各取り組みがより効果的・効率的に実施できるようにします。

- ・利用者や地域住民が管理運営に関われる機会の拡大
- ・地域間が連携した一体的で広域的な取り組みの推進
- ・すでにある仕組みを有効活用した関係者の意見交換の推進
- ・利用者や企業などのサポーターによるボランティアとしての活動への支援 など

#### ■担い手の育成

尾瀬の保護と適正な利用の主体となる担い手を育成します。

- ・尾瀬を愛する次代の獲得・育成
- ・研修などによる知識・技術を学ぶ機会の拡大 など

#### ■資金的サポートの充実

これからも尾瀬を育てていくためには、多くの人からの資金的サポートが不可欠であるため、広くサポートを呼びかけます。

- ・活動への寄付などの呼びかけ
- ・維持管理のための利用者負担のあり方の検討 など

### **視点④ 情報の効果的・効率的な発信**

#### ■認知度の向上

多様な媒体を活用し、尾瀬の価値や魅力を国内外に発信することで、「誰もが知る尾瀬」にします。

- ・テレビや雑誌などメディアとの連携による情報の発信
- ・SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)などのインターネットの活用
- ・イベントへの出展による尾瀬の露出促進
- ・情報を届けるターゲット及びターゲット別の発信方法の明確化 など

#### ■情報の提供

利用者や地域住民の尾瀬に対する関心を高め理解を得るため、尾瀬の現状や取り組み、その効果などについて情報をオープンにしていきます。

- ・統一的で分かりやすい情報の発信方法の検討
- ・ウェブサイトなどでの情報公開の推進 など

### **視点⑤ 的確な分析**

#### ■基本情報の収集

尾瀬の現状を調査し分析することで、今の尾瀬の姿を的確に把握し、取り組みに反映させます。

- ・利用者の利用実態に関する情報の収集
- ・尾瀬を取り巻く状況の変化の把握 など

## 2. 「みんなで守る」について

尾瀬が持つ普遍の価値や歴史・伝統・文化をみんなで共有し、かけがえのない尾瀬を守り育てていきましょう。

### 【今後の方向性・必要な取り組み】

#### **視点① 自然豊かな尾瀬づくり**

##### ■ 貴重な自然環境の保護

尾瀬本来の魅力である豊かな自然環境を次代に伝えていくため、これまで守られてきた原生的な自然環境をこれからも守っていきます。

- ・ 尾瀬の自然の特異性や価値への理解の促進
- ・ 尾瀬での活動が与える自然への負荷を最小限に抑制 など

##### ■ 植生の荒廃対策

尾瀬の自然環境を健全な状態で残していくため、新たな荒廃の防止と荒廃が進む植生の回復に取り組みます。

- ・ 山岳地帯や尾瀬ヶ原や尾瀬沼周辺における荒廃対策の実施
- ・ ニッコウキスゲなど尾瀬を代表する花々の回復にむけた取り組みの検討 など

##### ■ 外来植物対策

もともと尾瀬になかった外来植物は、尾瀬本来の生態系を脅かす存在であることから、新たな侵入と分布の拡大防止に取り組みます。

- ・ 侵入状況の把握と効果的な駆除方法の検討
- ・ 地域住民や企業と連携した駆除活動の実施 など

#### **視点② 歴史・伝統・文化が息づく尾瀬づくり**

##### ■ 歴史・伝統・文化の保全

地域に息づいた歴史・伝統・文化は、地域に対する愛着を深める大切な資源であるため、その価値を再認識しながら、しっかりと後世に残していきます。

- ・ 歴史・伝統・文化に関する地域の宝の掘り起こしと活用
- ・ これらが大切な地域資源であることを地域住民や利用者が再発見する場の拡大

##### ■ 新しい伝統・文化の創造

今を生きる私たちも、伝統や文化を創造していることを自覚し、誇りと責任を持って行動していきます。

- ・ それぞれの地域が持つ「強み」を活かした伝統・文化のアレンジ、発信

### **視点③ 野生動物との共存**

#### ■ニホンジカによる被害の低減

このまま被害が継続すると、生態系に回復不可能な影響を与える可能性があるため、積極的な管理を行います。

- ・優先して守りたいエリアマップの作成
- ・効果的な防除対策や捕獲手法
- ・効果検証のためのモニタリング手法の確立
- ・尾瀬の核心地や広域連携による越冬地での捕獲の強化
- ・捕獲したニホンジカの有効活用 など

#### ■ツキノワグマとの共存

ツキノワグマの生息地の中で、ツキノワグマと人の共存を図るための取り組みを実施していきます。

- ・ツキノワグマの生態や対応方法についての利用者への普及啓発
- ・巡視やクマ鐘の設置などの遭遇事故防止対策 など

#### ■新たな害獣への対応

周辺地域においてイノシシやニホンザルの生息域の拡大が指摘されていることから、新たな問題が尾瀬で発生しないように注意します。

- ・研究者や猟友会による動向の確認と情報共有 など

### **視点④ 尾瀬で学ぶ機会の拡大**

#### ■環境教育の推進

幅広い利用者層を受け入れられるフィールドとしての尾瀬の強みを活かして、子どもだけでなく、あらゆる世代が尾瀬で環境について学ぶ機会をつくります。

- ・学校団体による尾瀬での環境学習の推進
- ・企業の研修など、尾瀬を活用する新たな機会の拡大 など

### **視点⑤ 科学的知見に基づく保全**

#### ■調査研究の促進

それぞれの対策をより効果的に進めるため、調査研究から得られた知見が対策に反映される仕組みをつくります。

- ・保全活動の計画や実施に必要な科学的知見の収集
- ・研究者と公園管理者の情報共有や意見交換の推進
- ・継続可能な自然環境モニタリングシステムの構築 など

### 3. 「みんなで楽しむ」について

尾瀬のあふれる魅力をみんなで磨き上げ、自然を損なわない、多様な楽しみ方を互いに提案していきましょう。

#### 【今後の方向性・必要な取り組み】

#### **視点① 魅力あふれる尾瀬づくり**

##### ■尾瀬の魅力向上

何度も訪れたい尾瀬を目指すため、地域の宝（地域資源）を再発見し、その魅力を磨き上げていきます。

- ・地域の宝について学び再発見する機会の拡大
- ・新たな視点による地域の宝の発掘 など

#### **視点② 幅広い楽しみ方の検討**

##### ■多様な利用方法の検討

いつ来ても楽しい尾瀬を目指すため、季節を通じた利用のあり方やルールづくりを検討しながら、利用者に多様な楽しみ方を提案します。

- ・新たな尾瀬の楽しみ方の検討・意見交換
- ・地域特性に応じた残雪期や冬期利用のあり方の検討 など

##### ■エコツーリズムの促進

ガイド付き利用などを通じてエコツーリズムを促進することで、尾瀬の保護と地域の持続性の両立を図ります。

- ・質の高いガイドなどエコツーリズムに関わる事業者の育成
- ・地域の宝を活かした地域ならではの旅行商品や体験プログラムの作成
- ・ガイドを当日でも頼める仕組みの構築
- ・旅行エージェント等と連携したエコツーリズムの促進 など

##### ■利用のあり方の役割分担

エリアごとの地域性や自然の状態などを考慮しながら、その場所にふさわしい利用のあり方を考えます。

- ・地域特性等に応じた、対象とする利用者層や利用スタイルの提案
- ・利用者層や利用スタイルに応じた利用施設のあり方の検討 など

##### ■滞在型・周遊型の促進

地域ごとの資源につながりをもたせ、点ではなく線的・面的に考えていくことで、地域ごとの魅力をより広い視点でゆっくり楽しんでもらえるようにします。

- ・尾瀬を楽しむモデルコースの提案



- ・朝夕、星空など泊まらないと体験できない魅力の発信
- ・季節や場所ごとの魅力の発信による利用の分散化 など

### **視点③ 楽しむための土台づくり**

#### ■施設の整備

利用者が安全で快適に尾瀬を楽しめるように、必要な施設や登山道の整備を進めます。

- ・荒れた登山道や標識類などの整備
- ・情報発信拠点としてのビジターセンターや道の駅の有効活用 など
- ・長寿命化などトータルコストの低減の検討

#### ■ルール・マナーの共有

静寂で落ち着いた尾瀬の良さを損なわず、お互いが安全で快適に利用するために必要なルール・マナーを普及啓発します。

- ・携帯電話などの通信端末やドローン、冬期利用についてのルールの検討
- ・尾瀬を楽しむ上でのルール・マナーの普及啓発
- ・入山口やインターネットを活用した入山前後における普及啓発 など

#### ■望ましい交通アクセスの検討

自然環境に配慮しながら、尾瀬にふさわしい交通アクセスを検討します。

- ・分かりやすく利用しやすい乗り換え案内・掲示・誘導
- ・交通機関の乗り継ぎや本数などの見直しによる利便性向上
- ・首都圏からの尾瀬へのアクセスの利便性向上 など

#### ■安全対策

利用者が多様化する中で、より安心・安全に尾瀬を楽しめるようにします。

- ・事故や遭難を防止するための危険箇所の整備や利用者への普及啓発
- ・救助体制の整備や今後のあり方の検討 など

### **視点④ 自然を損なわない適正な利用の推進**

#### ■ルール・マナーの普及啓発

必要なルール・マナーを利用者に普及啓発していくことで、より適正に自然と触れ合ってもらえるようにします。

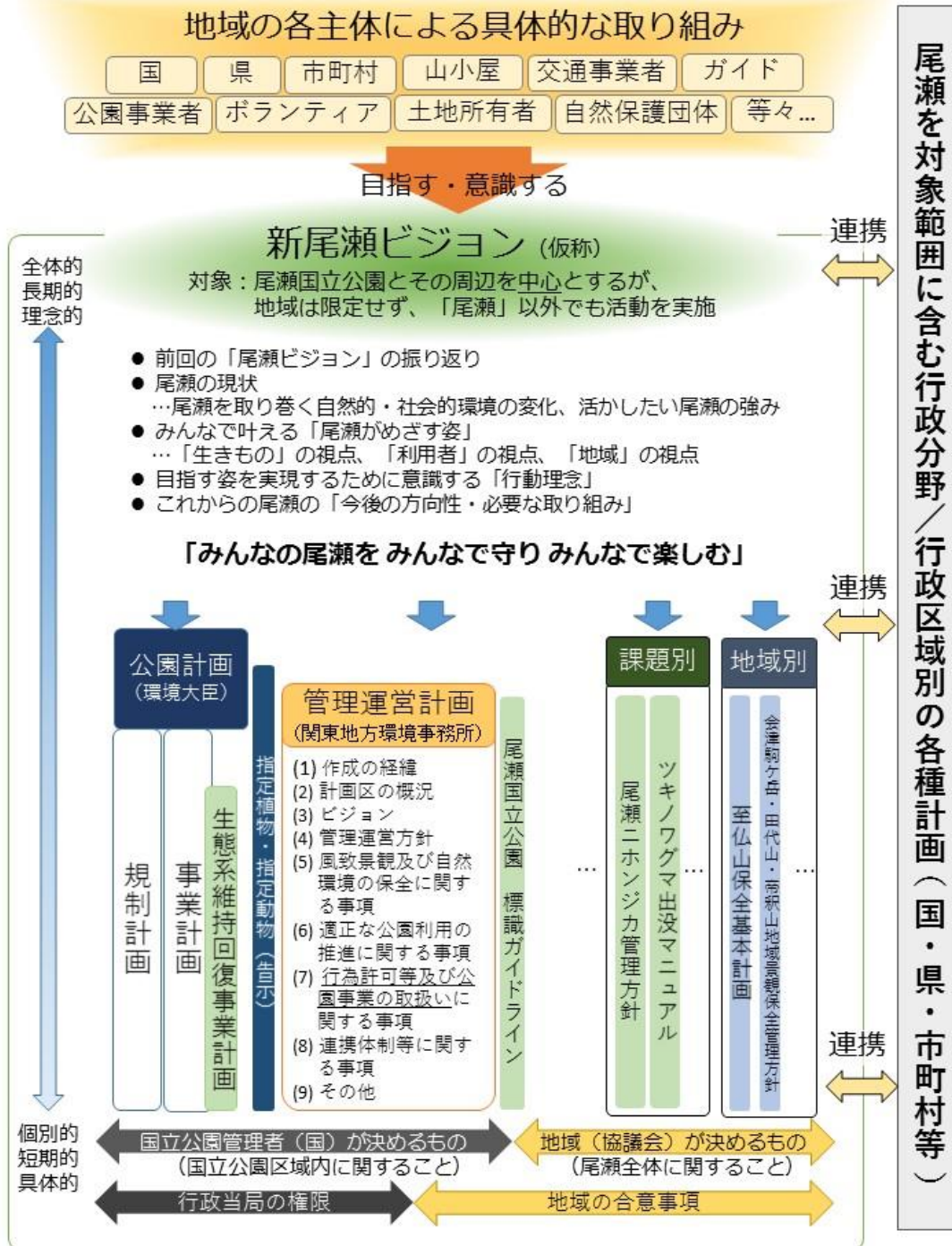
- ・自然を守るためのルール・マナーの周知徹底
- ・入山口やインターネットを活用した入山前後における普及啓発 など

資料編

- 尾瀬ビジョンと各計画の関係
- 生の意見集（カテゴリー、意見、発言者の属性）

新ビジョンと他の行政計画などとの関係

H30.3.8.ver



## 出典リスト

\* 1 :

「平成 27 年版高齢社会白書」 P5  
(内閣府)

[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/27pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/27pdf_index.html)

\* 2 :

「平成 29 年度尾瀬国立公園入山者数について」  
(環境省関東地方環境事務所 報道発表資料)

[http://kanto.env.go.jp/pre\\_2018/29\\_1.html](http://kanto.env.go.jp/pre_2018/29_1.html)

\* 3 :

「平成 29 年版環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書」 P137  
(環境省)

<http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/>

\* 4 :

「全国のニホンジカ及びイノシシの個体数推定等の結果について (平成 27 年度)」

(環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室 報道発表資料)

<http://www.env.go.jp/press/102196.html>

パンフレット「いま、獲らなければならない理由 (わけ) - 共に生きるために  
- 」

(環境省)

[http://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs5/imatora\\_fin.pdf](http://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs5/imatora_fin.pdf)

■尾瀬ビジョン改定における生の意見集 ※本文と意見の配置（みんなの尾瀬、守る、楽しむ）が異なっておりますが、今後きれいにしていきます。

2018/3/8時点

1. 「みんなの尾瀬」に関することについて

※紙面の都合上、「意見の概要」はご発言の趣旨を損なわない範囲で要約しています。

No.	キーワード		意見の概要
1-1	入山者	利用者ニーズの変化	人口減少や登山人口の減少などにより、これから更に入山者が減少することを危惧している。入山者が減っているのは、多くの方が車で簡単に行ける場所（観光地）に行くようになったからではないか。
1-2	入山者	情報発信のあり方	入山者が減った一因として、土日が大変混み合うというイメージの植え付けにあると思う。未だに土日は混み合うと思っている人が多い。
1-3	入山者	交通アクセス	マイカー規制が始まってから利用者が減った気がする。団体客も少なくなった。
1-4	入山者		高速バスの規制などの問題から本数が減った。入山者の減少の一因ではないかと思う。
1-5	入山者	交通アクセス	乗合バス代や駐車場代が高くなっていることも入山者が減っている一因ではないかと思う。
1-6	入山者		全体的にツアーが減っている気がする。関西圏からは、ツアー客・個人客ともに減少傾向である。
1-7	入山者		尾瀬が飽きられているのではないかと考えている。同じ道しか歩けないのが一因ではないかと思う。
1-8	入山者		震災後人が減り、回復できなくなった印象でいる。
1-9	入山者	高山植物の保全	ニッコウキスゲが減っていることが入山者の減少の主な原因だと思う。
1-10	入山者		現在は、情報に溢れており、旅行先も国内・海外を含め多様化している。入山者の減少はそういったことも大きな要因と思う。
1-11	入山者		日本全国に国立公園があるので、旅行会社や利用者は、尾瀬がダメでも他の所に行く。そういった競争にあることの理解が大切。
1-12	入山者	尾瀬の認知度	まず来て知っていただかないと意味がない。上高地をモデルにしても良いのではないかと。
1-13	入山者	尾瀬の認知度	尾瀬を知ってもらうためには、テレビの活用は効果が大いと思うが、逆にテレビを見る人も減って来ている。
1-14	入山者		尾瀬の周辺地域に人を呼び込むことも必要。周辺に来た人を尾瀬のコア地域に引き入れていくことも考えていかなければならない。
1-15	入山者	保護と利用のバランス	山小屋は人が入ったの商売であり、これまで「保護と利用」を進める中で、少し保護に振れすぎていたのではないかと。
1-16	入山者	自然環境の変化	単純に考えれば花の減少や湿原への笹の侵入、下界の植物が侵入していることで湿原らしさがなくなってきているので、入山者が減少しているのではないかと。尾瀬の映像や写真は、花のある湿原の木道を歩く様子がほとんどで、2000m級の山を越えて入山することが知られていないので、実際に入山すると大変と感ずることが多い。朽ちた木道、傾いて危険な木道など歩きにくいと感ずるためにマイナスの口コミがあるのではないかと。
1-17	入山者		入山者数が減っているのに、尾瀬をゆったりと楽しめる環境があるということも言えるのではないかと。
1-18	入山者	分析・評価	客観的な分析に基づき、尾瀬への入山者をどういう形で、何人確保することを目標とするのか、関係者間で共通認識を持つことが重要である。それがないと対策やその評価を行うことができない。
1-19	入山者	調査・研究の実施	どの程度の入山者数が適正なのか、考える必要があると思う。
1-20	入山者		もう昔のように入山者が大勢来る時代は来ないと思うので、適正な数を安定的に来てもらえるようにした方がいい。
1-21	入山者		尾瀬が人に来て欲しいと思っているのか見えて来ないので、地域の考え方をしっかりまとめて欲しい。
1-22	入山者		入込客数増加に向けたアイデア集やマーケティング戦略が必要
2-1	利用者ニーズの変化		利用者の「山離れ」が感じられる。
2-2	利用者ニーズの変化		登山人口が減少している中で、知識や経験の少ない利用者の増加や登山技術が継承されなくなっている。
2-3	利用者ニーズの変化		山小屋は不便さも良さの一つだと思うが、相部屋を嫌がるなど客層のニーズも変わっている。
2-4	利用者ニーズの変化		尾瀬の利用者は、「山小屋」だということを理解していない。旅館・ホテルのような期待をしてくる。
2-5	利用者ニーズの変化		昔に比べて、宿や施設を楽しみにしている人が増えた印象がある。昔は、泊まれば良いという考えが多かった印象。
3-1	少子高齢化		利用者として接する機会が多い交通事業者が高齢化しており、色々対応できなくなっているため、コンシェルジュ的な人を配置した方がいい。
3-2	少子高齢化	入山者	利用者・宿泊者・地域住民まで高齢化しているので、その世代がいなくなると来る人がいなくなるのではないかと。
3-3	少子高齢化	若い世代の誘致	若い世代を呼びたいが、若い世代も少なくなっているから大変である。
3-4	少子高齢化	地域の担い手	尾瀬の歴史を伝える人たちは高齢化しているので、次世代に繋ぐ必要がある。
3-5	少子高齢化		年をとってもずっと来られる尾瀬でありたい。
4-1	担い手		尾瀬地域は、半年間の仕事が主なため、安定的に働ける環境が非常に少ない。
4-2	担い手	少子高齢化	地域が少子高齢化・過疎化しているので、この現状を打破しないと尾瀬を守れない。担い手として、外国人留学生などの導入も検討する必要があるかもしれない。広い視野で見えていき、若者が沢山住み着くような尾瀬エリアにする必要がある。

No.	キーワード		意見の概要
4-3	担い手	ボランティア	担い手として、ボランティアの存在は大切に思う。
4-4	担い手		担い手不足に伴い、これまで山小屋が果たしてきた役割を果たせなくなっている。
4-5	担い手	少子高齢化	高齢化も伴って運転手が減っており、将来を考えると非常に不安である。マイクロバスなどで一人あたりの送客数を上げる必要もあると思う。
4-6	担い手	通信環境整備	若者に働いてもらうためには、通信環境などの整備は必要。
4-7	担い手	情報発信のあり方	尾瀬のイメージをアップしていかないと人は集まって来ない。
4-8	担い手	入山者	入山者がそのまま減っていくと、働いてくれる後継ぎが居なくなる。
4-9	担い手	少子高齢化	ガイドも高齢化していて、これから先については不安がある。
4-10	担い手		先人の持つ専門的な知識・経験をいかに次の世代にバトンタッチするかが課題である。
4-11	担い手		尾瀬関係者の定期的な研修会（他国立公園の取り組みの勉強会など）の開催が必要
5-1	若い世代の誘致		これからの社会を考えると、尾瀬を保護・保全するには、若い世代の参加が必要だと思います。自分と尾瀬の関わりを考えると、学生時代に経験したサブレンジャー制度が生きています。無くなって残念に思いますので、若い世代が参加しやすい環境や機会を是非作って欲しい。
5-2	若い世代の誘致	情報発信のあり方	若者への尾瀬の魅力発信や小中学生・家族での尾瀬散策への助成があると良い。
5-3	若い世代の誘致	サポート体制の構築	専門学校生や大学生を尾瀬に呼ぶ工夫として、ボランティア活動とセットにすると良いと思う。
5-4	若い世代の誘致	調査・研究の実施	若者の誘致のため、尾瀬を学生の調査・研究のフィールドとして、もっと活用した方が良いのではないかと。
5-5	若い世代の誘致		もっと若い世代が来るような取り組みをした方がいい。
5-6	若い世代の誘致	情報発信のあり方	ファミリー層をターゲットにしたらどうか。学生の山岳部などを狙ってみるのはどうか。
5-7	若い世代の誘致		親世代に自然や尾瀬への関心を持たせることが、子ども達を呼ぶためには重要。
5-8	若い世代の誘致		歳を重ねてからまた尾瀬に行きたいと思わせるためには、若い時に一度尾瀬に呼んでおく必要がある。
6-1	尾瀬のあり方		尾瀬は特殊な場所であると思っている。他の国立公園と同じようにしていきたいのか、違うものを目指していきたいのか、目指すべき方向性が曖昧になっている感じがする。
6-2	尾瀬のあり方		尾瀬の魅力はどうしていきたいか、ターゲットとして何を指していくのかなどを示してもらい、それに合わせるような形で事業者が事業展開していけば、うまくまわっていくと思う。
6-3	尾瀬のあり方		山小屋のサービスがどんどん良くなっていますが、それは美しい景観を後世に伝え残そうとする尾瀬にはふさわしくないと考えています。入山者の要望に合わせる必要もなく、山を俗世間と同様にすることなく（サービスは過剰にせず）、総合的な尾瀬の自然と人々の共生の在り方を検討する時期に来ているのではないのでしょうか。実践につなげる会議を設置して3県関係自治体、山小屋などで足並みを揃えることも必要かと思えます。サービス競争（＝客取り）のようなことがあっては、「尾瀬」の目指す理念やビジョンには合わないのではないのでしょうか。
6-4	尾瀬のあり方		尾瀬は、日本における自然保護・保全の先駆的役割を果たしてきたと言われており、関係者にはその自負もあると思います。しかし、保護・保全の課題は今や全国的なテーマであり、様々な取り組みが行われています。中には先進的な取り組みもあり、尾瀬地域が做すべき事例もあります。こうした取り組みも全国各地域、各地が個別に実践しているだけで、成果を他所で生かす努力は行われていません。課題や取り組みを共有して、効率的な保護・保全を実施する仕組みを構築したいものです。尾瀬はその中心的存在として今後もリードして欲しい。
7-1	地域の活性化		尾瀬の活性化には、地元山小屋・旅館・民宿の活性化が大切だと思う。
7-2	地域の活性化		若い人が帰って来て活躍できる環境が必要です。
7-3	地域の活性化	少子高齢化	地元地域の人口減少や高齢化は、尾瀬の保護や利用に関して様々な問題を生み出すと思われます。人が住まない所に「尾瀬」という価値あるものだけが存在することはあり得ないので、しっかりと地域運営が最も必要だと思います。
7-4	地域の活性化		尾瀬地域の経済をどう維持発展させていくかについても議論する必要がある。
7-5	地域の活性化		行政ができることも限界があるので、自分たちで考えていかなければならないことを認識すべき。
7-6	地域の活性化		地域活性化に向けたアイデア集が必要
8-1	尾瀬ブランド	情報発信のあり方	尾瀬のブランディングをしっかりと考えた方がよいと思う。
8-2	尾瀬ブランド	情報発信のあり方	尾瀬ブランドは従来よりも人々には食傷気味となっているのではないのでしょうか。イメージの更新や新しい尾瀬の顔（シンボル）を考える時期に来ているような気がします。
9-1	保護と利用のバランス		自然保護と観光の合致点をうまく作れると良い。
9-2	保護と利用のバランス		自然は楽しんでこそ守れるもの。アメリカのヨセミテ国立公園もそうだった。
9-3	保護と利用のバランス		尾瀬を大切な資源として、有効に活用していく必要があると思う。

No.	キーワード		意見の概要
9-4	保護と利用のバランス		「観光か」「保護か」という狭間でどちらを優先するかの議論に偏りがちになりますが、基本は“健全な自然があつての観光”です。保護が優先なのは自明の理ですから、このスタンスは貫かれなければなりません。どうしても当地や近隣地域には観光優先の意識傾向があつて、「死活問題」を持ち出されると寛容な判断になる傾向があると思います。地元などの意見や関係筋からの圧力も考えられますが、決して屈してはいけないポイントです。
10-1	外国人対応		外国人対応で重要なのは、受け入れ体制を整えること。闇雲に呼んでも定着しない。
10-2	外国人対応		外国人は来なくてもいい。静かな方がいい。
10-3	外国人対応	ルール・マナーの普及啓発	外国人はマナーの問題など課題は多い。
10-4	外国人対応	ルール・マナーの普及啓発	積極的に受け入れを進めており、独自の英語表記の受付表でマナー啓発を行っている。
10-5	外国人対応		外国人への対応で決定的な手法はない。HPやパンフレットなどの多言語化など、地道な活動がほとんどかと思う。
10-6	外国人対応	ルール・マナーの普及啓発	外国人は、小屋、テント泊とも少しずつ増えて来ている。言葉で不便を感じたことはないが、受け入れ体制の整備やマナー啓発を進める必要がある。
10-7	外国人対応	ガイド	マナーやルールを徹底するためにも、ガイド付きが基本であり、外国語を話せるガイドの育成が必要と思う。
10-8	外国人対応		宗教上の理由で食事メニューを変えたりしなければならないこともたまにある。
10-9	外国人対応	情報発信のあり方	インターネットなどで情報を得ている外国人は、簡単に尾瀬に行けると思っていたり、旅館でもりっぱなホテルの様な内容を安い料金プランで求めて来るので、なかなか対応が難しい。
10-10	外国人対応		留学生のような日本のマナーを知っている人に来てもらうことで、母国へも正しい情報が伝わるようになると思う。
10-11	外国人対応		訪日客を呼び込みたい国などと、実際に対応する現場の温度差があるので難しい。
11-1	障害者への対応	施設整備	富士見峠を身体障害者でも気軽に楽しめるようにするには、バリアフリー化などの施設整備が必要。また、2本木道では車椅子が利用できないので、木道をワイド化すれば身体障害者に優しい尾瀬にできる。
11-3	障害者への対応		障害のある人や高齢者をヘリで送迎するなど、入山が困難な人への支援体制（ヘリポート整備、旅行会社との連携など）
11-4	障害者への対応		聴覚障害の方が仲間と会えなくて困っている時があった。伝言板のようなものがあるのもいいと思う。まだまだ尾瀬の対応は遅れている。
11-5	障害者への対応		障害者にとっても優しい尾瀬であって欲しい。
12-1	尾瀬ファンの獲得	情報発信のあり方	尾瀬ビジョンの「みんなで守る」ということについて必要と感じるのは、お客様の尾瀬への愛着心だと考えている。そのために、山小屋で快適に過ごせることや、木道が整備されていることなどが大切。また一昔前のイメージを持っているお客様も多い。お風呂があることに驚くお客様もいる。みんなで変えていくことが必要。
12-2	尾瀬ファンの獲得		尾瀬を愛するリピーターをしっかりと育てていくことが大事。そのためにはまず1回来てもらうきっかけが必要。
12-4	尾瀬ファンの獲得		尾瀬ファンクラブを作って、尾瀬に関心を持ってくれる人を増やした方がよい。
12-5	尾瀬ファンの獲得		人口が減っている中では、1度来た入山者をいかに2回、3回と繋げられるか意識啓発できるかが大切だと思う。
13-1	利用者満足度		利用者の満足度を高めることが必要。
13-2	利用者満足度		入山者の満足度は、現場の山小屋やガイドなど事業者の接し方に大きく左右されると思う。もっと尾瀬の知識を付けるなど利用者サービスの質を上げなければならない。
14-1	情報発信		ニッコウキスゲ以外の花のPRを進めても良いのではないか。
14-2	情報発信	高山植物の保全	ニッコウキスゲは壊滅状態。お客様には、あまり期待させない方がよい。パンフレットやポスターとの乖離が大きく、お客様から苦情を言われることが多い。ニッコウキスゲが回復しても人が戻るかは疑問。
14-3	情報発信		ライブカメラをもっと有効活用して、登山者に情報提供した方がよい
14-4	情報発信		利用者の多くは、未だにオーバークースのイメージを持っている。それは尾瀬にとってマイナスだと思う。
14-5	情報発信		ハイシーズンの混雑具合がインターネットでわかるとうれしいです。
14-6	情報発信		尾瀬ヶ原の平らなイメージを植え付け過ぎた結果、軽装備の登山者が増えたと思う。
14-7	情報発信		利用者の持っている尾瀬についての間違っただイメージの払拭が大切。
14-8	情報発信		利用者には、尾瀬の素晴らしさだけでなく、抱えている課題などの現状も知ってもらうことが大切
14-9	情報発信		尾瀬が取り組んでいる自然保護の取り組みをしっかりと再発信することも大事なのではないか。
14-10	情報発信		残雪期の木道の雪かきなどは、お客様にもっとPRした方がよいのではないか。

No.	キーワード	意見の概要	
14-11	情報発信	尾瀬の「聖地」感を大切にしつつも、ある程度気楽に来れるイメージも必要。	
14-12	情報発信	財団ブログに尾瀬の情報を流してくれるのは有り難いが、山の鼻と尾瀬沼が同じ所で発信されているので、別々に分けて、個々の情報がまとめて見れる様にしてほしい。	
14-13	情報発信	メディアに取り上げてもらいやすいことを考えて実施する。	
14-14	情報発信	施設整備	ビジターセンターを入山口に移して、入山前にしっかりレクチャーして欲しい
14-15	情報発信	登山口でその季節の尾瀬の草花の簡易なガイドなどが配布されていると歩きながら楽しめて良い。	
14-16	情報発信	利用分散化	尾瀬のピークと村のピークを分けて売っていきたい。通年人が来るのが理想。尾瀬の人が少ない時は村に人を呼ぶ。
14-17	情報発信	尾瀬のピークと村のピークを分けて売っていきたい。通年人が来るのが理想。尾瀬の人が少ない時は村に人を呼ぶ。	
14-18	情報発信	アヤマ平の湿原から見る。至仏山、燧ヶ岳の姿、日光白根山に感動しました。もっと積極的にPRした方がいいと思いました。	
14-19	情報発信	日本100名山など山をもっと売る出した方がいい。しかし、登山道の改善は必要。	
14-20	情報発信	夏休みを家族で過ごすような売り方もいいかもしれない。	
14-21	情報発信	家族で楽しめるという切り口はありだと思う。	
14-22	情報発信	SNSでの情報発信は、やった方がいい。関係者が頑張ってるよりも利用者から発信してもらった方が受け入れやすい。	
14-23	情報発信	通信環境整備	携帯電話の新たな利用としては、ICタグの利用などの可能性がある。
14-24	情報発信	通信環境整備	携帯電話が通じることが悪になっているが、ネット環境や携帯電話が通じ、マナーを周知することが大切。
14-25	情報発信	他の観光地を参考に自然が好きで、山野草マニアなどに加え、歴史マニアなどをターゲットとしたストーリーも考える必要がある。	
14-26	情報発信	「尾瀬」というものがどこにあるのかという情報発信が不十分に感じている。	
14-27	情報発信	交通アクセス	尾瀬へのアクセスが分からないと言われたことがあるので、関係機関が協力してPRすることが必要。需要が増えれば、本数が増えたりして利便性が上がると思う。
14-28	情報発信	交通のアクセスをネットで調べても色々ページに飛ばなければいけないので情報が一括されていて、言葉ではなく図で簡単な物を作って欲しい。友達に勧めたいが、行き方が分かりにくいので伝えるのが難しいです。	
14-29	情報発信	「どんな計画で尾瀬に来ることができるのか」しっかり個人客向けに発信していくことが必要だと思う。	
14-30	情報発信	山小屋は初めてでしたが、どこも綺麗で想像と違った。なかなか登山、ハイキングをしたことがない人だと行きづらいイメージがある。	
14-31	情報発信	トイレチップ制度など、地元にも知らない情報が多い。	
14-32	情報発信	尾瀬の森林の役割をPR	
14-33	情報発信	利用分散化	閑散期と言われる時期の魅力を見つけて、発信することが大切。
14-34	情報発信	登山道に良い名称を付けることができれば、より親しみやすくPR効果も高まると思う。言葉や歌の力は大きいので、良い言葉があれば伝わり方は大きく違ってくると思う。	
14-35	情報発信	楽しむというところはDMO的な視点が必要であり、関係者間の統一的な取り組みが必要。	
14-36	情報発信	宿泊型という考え方も人気なので、よいルートがあればモデルコースを出して発信するのも良いと思う。	
14-37	情報発信	ロングトレイルという考え方も人気なので、よいルートがあればモデルコースを出して発信するのも良いと思う。	
14-38	情報発信	多様な利用	今までマイナーだったルートのモデルコースを紹介し、登山者のレベルに合わせた新たな尾瀬の楽しみ方を提案するのも一考でしょう。この意味で富士見小屋の閉鎖は、稜線通しの中継・休憩地やエスケイブルートの起点として重要であっただけに痛いところです。
14-39	情報発信	尾瀬沼や尾瀬ヶ原までのルート（初心者～上級者レベルごと）が描かれた地図が無料でもらえるのととてもうれしいです。	
14-40	情報発信	施設整備	20～30代の若者が尾瀬に遊びに来るようにビジターセンター周辺の魅力の整備や魅力の発信
14-41	情報発信	尾瀬の魅力向上	若い人は美味しい食べ物が弱いため、お土産や名物のPRを増やすと良い。
14-42	情報発信	尾瀬の紅葉は素晴らしいと思っているが、最近東北（特に栗駒）が人気である。尾瀬のPR不足でないかと思っている。	
14-43	情報発信	一般の方に、尾瀬について、正しい知識を持って知ってもらうこと。（バスをおいたら木道と湿原が広がっているのは間違いで、必ず峠を越えて入らないといけない。湿原に敷かれている木道設置の意味。なぜ国立公園に指定されているのか。特別保護地区である理由など。）次に気軽にいける高原ではなく、山であることを認識してもらい、それなりの装備で入山してもらうこと。	
14-44	情報発信	野生動物対策については、もっと情報を広く提供していくべきであり、なぜ鹿柵を設置しているのか、設置場所に明文化したものを掲示するなど（イマドキであれば、QRコード読み取りも可）して、一般利用者にもわかりやすく理解してもらえる情報提供をしていただきたい。	
14-45	情報発信	あまりスマホなどを見て歩かれるのも問題ですが、「尾瀬アプリ」を開発して、登山地図機能（現在地も表示）、現地の気温や気候がわかる天気予報の情報提供、看板に設置してあるQRコードを読み込めば動植物や地名などの情報が入手できたりするのもよい。	
14-46	情報発信	ガイドやボランティア、乗合タクシー内を活用した入山前レクチャーの実施	
14-47	情報発信	旅行業関係者と協力して、途中のバス内で、どこでどんな話して参加者を盛り上げたらよいかレクチャー資料を作成するのはどうか。	

No.	キーワード		意見の概要
14-48	情報発信	ルール・マナーの普及啓発	尾瀬について紹介するネット情報を正しいものとする、旅行会社はパンフレットに明記すること、シャトルバスや旅行会社の車内で正しい知識の教育を行うなどして、安易な入山を防ぐようにしてもらいたい。
14-49	情報発信	通信環境整備	登山道の通行止めの情報などはネット環境が整えばメールリストをリアルタイムで送って欲しい。
14-50	情報発信	利用分散化	九州や関西の人達の話や尾瀬への憧れや関心が高いことが分かる。そうした人達をターゲットとすることも検討してみてもどうか。特に、魚沼からのルートは、関西や北陸からのツアー客に対しては、開拓の余地があると思う。
14-51	情報発信	地域との繋がり	関係機関が、尾瀬に関する地図を作成している。各々の団体や機関によって少しずつコンセプトが違うのだと思うが、経費を出し合い同じ地図を作成し、浮いた経費をPRコストに充てるなど検討をしてもいいのではないか。
15-1	尾瀬の認知度	情報発信のあり方	尾瀬のネームバリューの低下があるので、新しい層を開拓しなければならない。
15-2	尾瀬の認知度	情報発信のあり方	「尾瀬を守る」ためには、もっと多くの人に尾瀬を知ってもらうことが重要
15-3	尾瀬の認知度	情報発信のあり方	田代山は、国立公園に編入されたがまだまだ認知度は低い。
16-1	利用者の声の反映		お客さまの意見を集める工夫が必要。
17-1	つながり		3県が連携し、尾瀬を縦断して下山した先の観光案内や宿泊案内、交通案内がスムーズにできる体制作り。
17-2	つながり		関係自治体、団体、事業所、民間の連携と協力
17-3	つながり	地域の担い手	地元の人と尾瀬の関わり方が希薄になり地元の間でも尾瀬に行かなくなっているのが、恥ずかしい話だが研修として行く時もある。
17-4	つながり		世代交代や経営譲渡などで、山小屋間の付き合いが希薄になってきている。山小屋組合のあり方も見直す時期にあると思う。定期的な意見交換の場を作った方がいいのではないか。
17-5	つながり		地元市町村が「地元」意識が薄いと感るので、各市町村が連携した取り組みを実施した方がよい。
17-6	つながり		大人が知識を得る環境が少ないので、尾瀬を地元と認識できるような働きかけが大事だと思う。
17-7	つながり		多くの人に尾瀬や自然と自分との繋がりを感じてもらえるようにできるとよい。
18-1	分析・評価		これからの尾瀬を考える上では、マーケティングの視点も重要だと思う。
18-2	分析・評価		様々な要因が考えられるが、入山者が減っている要因を分析するようなことも大切だと思う。
18-3	分析・評価		現行の尾瀬ビジョンに対する評価が必要。現状の評価がないと何が課題かということも言えない。
18-4	分析・評価		現在抱えている諸問題が解決されることが一義的で、それなしには将来像や理想像を思い描いても、絵に描いた餅・希望的観測で終わってしまいます。したがって、それら諸問題を整理し、個々について現実的に則して正直に検討・分析・評価を行ない、解決できるか否かを含め、対応方法を検討すべきでしょう。これをしなければ、どうあるべきかが見えてこないと考えます。



2. 「みんなで守る」に関することについて

No.	キーワード		意見の概要
1-1	野生動物対策	自然景観の保全	ニホンジカをしっかり捕獲して、これ以上被害が出ないようにして欲しい。
1-2	野生動物対策		捕獲だけでなく、肉や革を利用・商品化した方がよい。すでに実践している団体もあるが関係市町村の飲食料店旅館、売店でも利用できるよう流通ができないだろうか。(群馬県四万温泉では獣害のイノシシを捕獲、肉を温泉地の名物料理として活用しているとのこと。)
1-3	野生動物対策	自然景観の保全	ニホンジカ対策については、現状の湿原だけ守れば良いという考えは捨てて、戸倉山林の車道沿いに防鹿柵を設置するなどして、管理や設置のしやすい対策を取るべきと考えます。
1-4	野生動物対策		柵の効果が出た大江湿原のように、尾瀬ヶ原も早期に柵の設置をお願いしたい。雪深い尾瀬なので、維持管理が大変なのであれば、外周部にある林道など、管理しやすい場所に設置し広域で守り、柵内では一斉駆除を行うなど、綺麗事でない対策が必要だと思います。
1-5	野生動物対策		尾瀬の守るべき場所は柵などで囲うべき。ただ柵はどがお金を出し、管理するのかレベルの話になってしまう。協同で出来る仕組みづくり。クラウドやボランティアなど関係者の活用・協力など
1-6	野生動物対策	自然景観の保全	ニホンジカによる食害や攪乱はあるが、尾瀬ヶ原を柵で囲うことは現実的でないし、他の野生動物などに与える影響を考慮する必要がある。
1-7	野生動物対策	情報発信のあり方	ニホンジカによる食害に関しては、どのようにすれば入山者に理解してもらえるかということが課題。入山者の多くはシカに遭遇できて嬉しいというレベルで、被害がすごいという感覚を持っていない。丁寧な説明が必要
1-8	野生動物対策		シカ対策の目標・目指すべき所(どういう状態であればよいのか)が明確でない全体に何頭いるのか分からない。
1-9	野生動物対策		シカは日夜で湿原⇄森林、季節で尾瀬⇄日光・足尾を移動している。足尾の越冬地でも尾瀬に来る個体は標高の高い稜線部(半月山など)にいて捕獲が難しい。高標高域での捕獲手法の確立。
1-10	野生動物対策		南会津では林業被害はそこまで大きくないが、今年から目立ちはじめた。今後拡大していく可能性もある。館岩地域から北上しているようだ。
1-11	野生動物対策		近年はニホンジカによる植生攪乱などが広がっていますが、これも人為的な影響のひとつとして考えるべきものです。
1-12	野生動物対策		ニホンジカの捕獲時期の調整などを官庁横断的、組織横断的にできればよいと思う。春に妊娠したメスジカを捕獲できれば効率がよい。
1-13	野生動物対策		ツキノワグマの出没が多い。噂が広がると尾瀬のマイナスイメージとなるので注意喚起が必要。
1-14	野生動物対策		田代山山頂湿原にツキノワグマが出没するようになっている。
1-15	野生動物対策	登山道整備	テンマ沢湿原の木道を高架化
1-16	野生動物対策	施設整備	クマ除けの柵をもう少し増やしてみてもどうでしょうか。
1-17	野生動物対策		至る所でミズバショウの刈払いが行われ、最大の魅力とも言える風景はガタガタ。ツキノワグマは駆除出来ない野生動物の代表格ですが、人のいる場所に出てくるようになった原因は頭数の増加ほか複合的な理由だと思います。原因究明と対策を急がないと、入山者は減る一方ではないかと思っています。
1-18	野生動物対策		特別保護地区内でクマを捕獲するのはおかしい。殺さずに、観光資源にするべき(施設を造るなど)。高架木道や一時的に電柵を張るなどの対策をとるのはどうか。
1-19	野生動物対策		昔は、銀山平周辺はシカやサルがいなかったが、近年見られるようになってきている。
1-20	野生動物対策		麓にいるイノシシがこれから尾瀬内に入ってこないか心配している。
2-1	外来植物対策		外来植物の増加が気になっています。20年前に既に移入していたオオパコ、近年すごい勢いで増えているオオハンゴンソウなどです。集団施設地区は既に人工的に管理されているので「どんな植物も抜いてはいけない」という決まりも、エリアと種を確定した上で駆除対象とすべき。それらの植物を、ボランティア活動として、日にちを限定して作業確認ができる人を配置した上で駆除するイベントなども良いかと思っています。また、種子落としマットが入山口にしか無いのは片手落ちです。既に集団施設地区に外来植物は大量にあるので、そこから尾瀬ヶ原や大江湿原に入る場所には設置した方がよいと思います。微力ながら啓発の一つにもなると思います。
2-2	外来植物対策		鳩待峠の種子落としマットの改良。さらに、福島県側にも種子落としマットを設置し、尾瀬として統一的に取り組んだ方がよい。
2-3	外来植物対策		ガイドが外来植物をガイド中にお客様と一緒に除去することはダメなのか。一番外来植物について理解してもらい易いと思う。
3-1	自然景観の保全		利用と保護は表裏一体と考えます。私たちが感動する自然とは人工的なものではなく、まさに手付かずの自然です。私たちがやるべきことは自然を修復することではなく今の姿を守ることです。
3-2	自然景観の保全		尾瀬の静けさを守って欲しい。
3-3	自然景観の保全	ゾーニング	基本的には尾瀬の自然全てを守るべきであって、人間の利用に関することがそれらに優先することがあってはならないでしょう。入山規制なども必要かもしれませんが、地域性、自然の現状・評価、季節、時間、適正人数、登山に関する計画や技術・レベルなど細かく検討した上で、決めるべきではないでしょうか。
3-4	自然景観の保全		人間がお邪魔しているのだからこれ以上はいらない。
3-5	自然景観の保全		人気のある無しや大小に関わらず、尾瀬らしい植生を守ることが大切です。本州最大の高層湿原とそれを囲む山々の全体がバランス良く守られるべきです。

No.	キーワード	意見の概要	
3-6	自然景観の保全	尾瀬はその成り立ちからして国立公園の環境保護の先駆者となるべきです。そのためには平野長蔵をはじめとした多くの先人達が命を懸けて守った自然を残すことが重要です。貴重な自然を残すために最も必要なことは自然を汚す1番の加害者である人の入山を規制することです。尾瀬の観光地化には大反対です。	
3-7	自然景観の保全	尾瀬は人里と隔絶された奥山地域にあって、過去の開発との戦い・荒廃化との戦いの中で守られ続けてきた経緯があります。多くの登山者が求めるものは「歩いてこそ見ることが出来る「開山の頃と変わらぬ自然」だと思います。本物の自然だからこそ得られる体験は環境教育の資源としても高い価値を有しています。	
3-8	自然景観の保全	尾瀬国立公園の中では小さなことかもしれないが、田代湿原の川衣実の崩壊対策を危機感を持って進めていただきたい。	
3-9	自然景観の保全	田代山山頂湿原の荒廃箇所の回復作業を実施する必要がある。	
3-10	自然景観の保全	登山道整備	高山植物の減少と登山道の荒廃への対策を進めるべき。
3-11	自然景観の保全	登山道整備	至仏山の3箇所の登山道について、付け替えるべきと結論を出してから進んでいない。早急に対策を取って欲しい。
3-12	自然景観の保全		笠ヶ岳周辺では、湿原への踏み込みや湯ノ小屋からのルートが湿原中を通っていたりするので裸地化しています。定期的な登山道などの巡視が必要でしょう。手当てできなくても、現状を把握しておくことは管理する上で大切なことです。また、訪れる人が少ないところでは盗掘のリスクにも常時さらされています。特に笠ヶ岳は、至仏山と同様に蛇紋岩の山で、貴重な蛇紋岩特有な植物が生育しています。できればボランティアの力を借りてでも巡視員の配置ができると良いと思っています。
3-13	自然景観の保全		オヤマ沢田代上部の笠ヶ岳への分岐付近の御用適地は特に糞尿だらけで、知る人ぞ知るキジ場です。毎回登る度に必ずどこかで御用跡を目撃します。荒廃登山道整備とともに、最優先に取り組むべき課題だと思います。
3-14	自然景観の保全	情報発信のあり方	尾瀬は昔から希少な動植物の宝庫として知られています。これは多雪気候による地域的な固有種の存在とともに、高層湿原、高山植生をはじめとした寒冷地の生物が遺存的に残ってきたことによるところが大きいと言えます。このように尾瀬は寒冷気候下の生物のレフュージアとなっており、それゆえ温暖化に対する脆弱性を内在していると言えます。これらの生物が存在する生態系は、それを取り巻く自然林とともに一体化し、ひいては地域の生態系のみならず生物の種の多様性を高めることになっています。原生自然として規制を加えて生態系ごと保全するとともに、尾瀬の価値・生態系や生物多様性について発信する必要があると思います。
3-15	自然景観の保全	ルール・マナーの普及啓発	多くの人が来ることによって、昔のように自然が壊れてしまうのではないかと心配している。
3-16	自然景観の保全		自然を守るためには、まず来て見てもらうことが必要。自然を見て圧倒されれば、きっと自然を守る意識が芽生える。
4-1	高山植物の保全		ニッコウキスゲが少ないと利用者も減ってしまうので、しっかり守っていく必要がある。ニッコウキスゲの種を播いて増やすようなことはできないのか。
4-2	高山植物の保全		ニッコウキスゲを復元して欲しい、
4-3	高山植物の保全		特にニッコウキスゲの減少は目で見て明らかだが、その他の高山植物も含め、経年的な変化が客観的な指標としてあると分かりやすい。
4-4	高山植物の保全		荒れてしまった植生の回復に取り組んでいく必要があるのではないかと。
4-5	高山植物の保全		田代山では高山植物の盗掘が見受けられるので対策を考えたい。
5-1	自然環境の変化		ヤマドリゼンマイが生育場所を拡大しているので、多少食べて数を抑えた方がいいのではないかと。
5-2	自然環境の変化		昔より池塘が少なくなったと思う。
5-3	自然環境の変化		富栄養化によって植物が影響を受けている場所も感じられるので対策をお願いしたい。
5-4	自然環境の変化		年間平均気温が高くなり、降水量も減少しているのかもしれないが、湿原が戦場ヶ原のように乾いてきている。笹や低木が侵略してきており、湿原の面積が減少しているように感じる。地球温暖化による気象の変化が尾瀬の環境変化をもたらしていると思う。このままでは尾瀬が尾瀬でなくなる危機感を持っている。
5-5	自然環境の変化		最も心配なのは近年の気候の変わり方だと思います。当地は数年来、過去に記録の無かった様な大雨が数回あり、未だ復旧できていない状態が続いています。
5-6	自然環境の変化		多くの人は自然を静的に捉えがちですが、本来自然というのは動的な存在です。いつまでも現状のままの姿ではありません。そこで重要なのは、その時その場の自然の姿を残すことです。計画的な調査（総合学術調査・福島群馬の委員会による調査ほか）や標本作製を今後も進め、現状を確実に記録として残していくことが、自然を動的に捉えて真実の変遷のプロセスを明らかにすることになります。これは大きな人類の知的財産になりますし、未来の保護・保全策を講じる礎になるものです。
6-1	調査・研究の実施		尾瀬に関しては、まだ学術的に分かっていないこともある。第4次尾瀬総合学術調査の実施によって、自然環境の変化のメカニズムを解明させたい。
6-2	調査・研究の実施	モニタリング	尾瀬のもつ水源涵養能力や土砂流出防備能力は、多様な生態系が機能し合うことによってもたらされます。これらをはじめとする生態系サービスは尾瀬が自然のままの多様な生態系を有することにより初めて機能します。尾瀬を将来にわたり適正な利用を行うためには、環境・生態系のモニタリングを続けながら、持続可能な許容能力を意識した利用計画をその時々で計画・検討・実行することが重要だと考えます。

No.	キーワード		意見の概要
6-3	調査・研究の実施	受益者負担	尾瀬の保全を行うためには、その地域の自然を正しく理解することが不可欠です。今までに行われてきた保全にかかわる事業などについても、自然の把握が十分に行われないままに進められたことで、効果が上がっていないところがあります。尾瀬の自然の状態を把握するためには、総合学術調査だけではなく、地元へ根付いた継続的で地道な調査活動が必要です。この継続的な調査活動を行うためには、専門の研究部門を設け、動植物（植生や大型哺乳類など、できれば地形地質も）の研究者を複数配置するのが良いと思います。研究者の配置には、資金が必要ですが、『入山料』を徴収すれば、その中から充てることができると思います。
7-1	自然について学ぶ場作り	自然保護の理解者の育成	尾瀬も社会への貢献を考える必要があります。そのためには、ただ来て帰るだけでなく、自然保護の理解者になってもらえるよう努力しなければならない。より多くの人に尾瀬を知ってもらうことが重要であり、尾瀬の自然を見て学ぶ環境の整備が必要です。
7-2	自然について学ぶ場作り		普段自然に触れられていない人が来た時に、しっかり自然との接し方を学べる場作りが大切だと思う。
7-3	自然について学ぶ場作り	環境教育	もっと校長先生を動かして、環境教育としてもっと子どもたちを呼んだ方が良い。
7-4	自然について学ぶ場作り	環境教育	各県で環境教育を進めているが、そうした取り組みは今後も重要である。
7-5	自然について学ぶ場作り	環境教育	尾瀬での環境学習については、学校の先生方も尾瀬の素晴らしさは認識しているけれども、自然を守るために採ったり食べたりができないので、教育の観点からすると、他の場所で魚取り・虫取りをさせた方が良いという考え方があると聞いている。
7-6	自然について学ぶ場作り	環境教育	文京区の環境学習が始まって6年たった。最初の参加者も徐々に大きくなって来たので、その世代がまた来てくれないかと期待している。
7-7	自然について学ぶ場作り		今の状態の保護だけでは、尾瀬への関心が薄れてしまう。環境省の職員により、尾瀬の（魅力）植物について小中学生に伝え、関心を深めさせて欲しい。
7-8	自然について学ぶ場作り		自然保護については、若い人が若い人に伝えた方が伝わりやすいと思う。
7-9	自然について学ぶ場作り		財団などに寄付している企業の社員研修・家族旅行の場に使ってもらえたら良い。
7-10	自然について学ぶ場作り	調査・研究の実施	若い人たちにもっと研究活動に興味・関心を持ってもらいたい。
7-11	自然について学ぶ場作り	自然保護の理解者の育成	単なるツアーではなく、プレミアムツアー（“上質な”ということと“特別な+α”という意で）を積極的に企画するのも良い手だと思います。泊を伴い入山口から下山口まですべてに有識者などが同行し解説するというものなどです。これは営業ではなく、自然を理解し保護・保全の観点や方策を広める啓発のためのもので、小屋の夜は、講師の仕事や研究の紹介、尾瀬に関するフリートークなどもあったりします。実施は、春、夏、秋の3回で1回20名程度でしょうか。これはあくまで拙案ですが、従来の既成概念にとらわれることなく、様々なアイデアで取り組みの幅を広げる努力は必要に思います。業者の営業を妨害するようなものではなく、営利目的ではなく啓発目的ですから問題もないと思われれます。
7-12	自然について学ぶ場作り	尾瀬ファンの獲得	尾瀬へのアクセスが容易であればあるほど小屋泊が減り、日帰りが多くなるという現実があります。一方では、保護上良いことかもしれませんが、啓発機会を逸していることにもなっていると思います。前述の拙案などを通して尾瀬への正しい理解とマナーをもったりリピーターを増やすことは、その1人1人が広告塔となり、やがて大きな効果をもたらすと考えます。今回は、友人・知人、職場の同僚を同伴しながら自信をもって尾瀬を語ってくれることでしよう。尾瀬の蘊蓄が得られれば、リピーターには次に訪れる動機となり楽しみにつながると思います。
7-13	自然について学ぶ場作り	環境教育	地元の子もたちの自然環境への保護意識はかなり強く、優れた点だと思う。子どもたちへの環境教育の成果だと思う。
7-14	自然について学ぶ場作り	先駆的役割	人々に尾瀬を例とした正しい自然への理解をいただいて、人為による介入、破壊を極力抑制するという不断の努力を続けなければなりません。尾瀬は、自然保護・保全のモデルとしてハイレベルな意識と実践を展開するフィールドであってほしいと願っています。
8-1	サポート体制の構築		財政状況が厳しくなる中で、広く社会に呼びかける新たな仕組み作りの検討が必要。
8-2	サポート体制の構築		尾瀬のリピーターの中にはボランティアとなると敷居が高いし、もっと自由に尾瀬に貢献したい人もいますし、地元自治体に協力したい人もいます。尾瀬を核としてそのような人々を地域サポーターとして活躍の場を提供することで、他の尾瀬入山者への啓発につながりますし、村おこしにも役に立つと思います。
8-3	サポート体制の構築		もっと参加型、体験型の事業を増やすのもよいことかと思っています。たとえば、「もし至仏山の登山道整備に多くの石が必要だとすれば、登山者の自由意思に基づいて大小様々な大きさ重さの石の中から1個ずつを現地まで運び上げてもらう」というようなことです。誰でも参加しようと思えば手軽にでき、後には成果が目に見える形で残り、保護意識の向上や記念にもなるうかと思えます。
9-1	受益者負担	入山者	入山料を考える必要はあると思うが、入山者の減少が懸念されるので厳しい。入山料を導入するならば、訪れた記念になる物を渡せると良い。
9-2	受益者負担		入山料などでトイレの協力金を回収する方法にして欲しい。お金の出し入れが山だとしにくい為。
9-3	受益者負担		目的がしっかりとしていれば、入山料に対して入山者が文句を言うことは少ないと思う。問題なのは、そのお金をどう割り振るかだと思う。
9-4	受益者負担	施設整備	入山者が減っているという中で怒られそうだが、施設整備などの費用はある程度のレベルから落とせない訳なので、費用捻出のためには入山料という考え方も必要だと思う。そういった考え方に賛同してくれる人達を増やす努力が必要なのではないか。
9-5	受益者負担		維持管理の費用面の問題が一般利用者に聞こえていないので、広く知ってもらった方が良い。
9-6	受益者負担		入山料を聴取してもツアー客は減らないと思う。仮に入山料を徴収することになった場合には、それに対するお返し（タオル+地図など）があると良い。徴収額は、日帰り1,000円以下として欲しい。
9-7	受益者負担		入山料の導入にチャレンジしてみてもよいのではないかと。今後の国立公園のモデルケースになり得る。

3. 「みんなで楽しむ」に関することについて

No.	キーワード	意見の概要
1-1	尾瀬の魅力向上	冬はスキー（1/5は山スキー）で来る利用者が多い。尾瀬の魅力の一つだと思う。
1-2	尾瀬の魅力向上	白尾山・血伏山は魅力あるコースと思う。
1-3	尾瀬の魅力向上	何度か尾瀬に来た人にとっては、自由に歩ける残雪期がいいらしい。
1-4	尾瀬の魅力向上	星や蛍、朝もや、白い虹を売れたらいい。
1-5	尾瀬の魅力向上	渋沢大滝はよい資源だったので、ちゃんと行けるようになればよい。
1-6	尾瀬の魅力向上	尾瀬のブランド力は、「歴史」「自然保護」が売りだと思うが、そうすると年齢層が高くなる。
1-7	尾瀬の魅力向上	尾瀬の本質的な楽しみ方は、豊かな自然や、それを守る活動の発祥の場であること、それを知る面白さだと思います。
1-8	尾瀬の魅力向上	外国人は、お花というよりも風景を楽しみにしている。
1-9	尾瀬の魅力向上	8月は登山での利用者が多い。
1-10	尾瀬の魅力向上	キャンプ利用者の利便性向上（入浴、夕食など）
1-11	尾瀬の魅力向上	花の時期以外も景色を楽しめるようにもしたい。
1-12	尾瀬の魅力向上	ツアー客の高齢化やリピーターの減少を踏まえると新たな魅力を創造して欲しい。例えば、特定のツアーに申し込まないと体験できないことや安全を前提とした冬の入山などができるとお客さんは集まると思う。
1-13	尾瀬の魅力向上	尾瀬オリジナルグッズをモンベルなどと提携して販売
1-14	尾瀬の魅力向上	情報発信のあり方 観光地にありがちな物見遊山的なものではなく、知的な面の充実をはかることも重要でしょう。「尾瀬の魅力アップ」には、サービスを過剰に充実することではなく、利用する人達に対して、如何に賢い利用をしてもらうか、そのための情報提供も重要な課題となります。
2-1	多様な利用	ブナ平で「ジップライン」という楽しみ方も面白いかもしれない。
2-2	多様な利用	自然保護の観点からすごく難しいとは思いますが岩魚が食べれたらいいなと思います。
2-3	多様な利用	尾瀬沼に手こぎボートを浮かべる。平日だけにすれば、分散化にも繋がるのではないかな。
2-4	多様な利用	尾瀬により多く集客する対策として尾瀬沼の活用。電気動力による渡し舟の運行。尾瀬の楽しみ方が増える。老若男女が利用することにより、福島・群馬両県からの観光客が必ず増える。
2-5	多様な利用	沼で釣りや和船ができればいい。
2-6	多様な利用	もっと動物が身近で見られる所があったらうれしいです。
2-7	多様な利用	オコジョに会えるサービス
2-8	多様な利用	捕まえたシカなどで子どもが遊べるふれあいコーナーを作ればいいのではないのでしょうか。
2-9	多様な利用	イベントで沼山峠からビジターセンター/ビジターセンターから沼山峠などトンカチを貸与して登山者に木道を修理してもらうようなもの。
2-10	多様な利用	尾瀬でライブはどうか。個人的にはあまりしないほうがいいと思っているが。
2-11	多様な利用	花や木、葉、星空の他、朝日を見るイベントがあったら良い。
2-12	多様な利用	星空/植物/鳥/魚に特化したカルチャースクール
2-13	多様な利用	半年間の講習で、月1位で色々なテーマの先生や詳しい人(財団とか環境省の人・山小屋さん・ガイドさん・ボランティアさん)など尾瀬に関わっている人の講習があり国立公園のこと、自然保護のこと、ボランティアのこと、植物、生き物、星空、などちょっとコアな話が聞ける【尾瀬スクール】があったら面白いと思う。
2-14	多様な利用	山小屋でウェディングドレスに着替えて写真を撮っている方がいたので、山ガールも増えた中で婚活イベントを開催するのはどうか。
2-15	多様な利用	採集イベントや標本作り・味覚体験
2-16	多様な利用	尾瀬内の夜ツアー開発とPR
2-17	多様な利用	沼を見ながら日帰り湯が入れたら良い
2-18	多様な利用	テント泊がもっと出来る場所が多ければいいと思います。
2-19	多様な利用	湿原に撮影ポイントを設置して撮影台や専属カメラマンを配置
2-20	多様な利用	ハート型の池塘を恋愛スポットにする。
2-21	多様な利用	子どもが楽しめる場作りが大切。
2-22	多様な利用	村の子どもを対象に山菜採りなどの体験イベントができればいいかもしれない。

No.	キーワード	意見の概要
2-23	多様な利用	カフェを増やしてお客さまがのんびりできる場所を増やす
2-24	多様な利用	外国人を呼ぶという上では、登山以外の楽しみが必要だと思う。例えば、放射能の問題がクリアされれば、尾瀬の鹿を使ったジビエ料理などは売り物になると思う。
2-25	多様な利用	生い立ちなどに関するサイエンスカフェ
2-26	多様な利用	期間限定のスターバックスなどを出展できれば、新しい魅力になると思う。
2-27	多様な利用	親子連れなどを対象にテントのレンタルを始めるのはどうか。
2-28	多様な利用	地域イベントなどと尾瀬行をセットにした旅程
2-29	多様な利用	新しい登山道でもできれば違うと思う。背中アプリ田代やメッケ田代まで行けたら面白いと思う。
2-30	多様な利用	尾瀬ヶ原のアヤマ平側の山際に登山道がある方がカミナリ対策にもなる。
2-31	多様な利用	尾瀬ヶ原が見渡せる展望台があるといいと思っている。
2-32	多様な利用	現在は雪のある時しか行けないが、小沼や治右衛門池まで行ける登山道があるとよい
2-33	多様な利用	白い虹フェスタのような泊まらないと見られないような企画をやってもいいのではないかな。
2-34	多様な利用	きれいな空気を用いたエクササイズ・ヨガなどヘルス関係を推してもいいのではないかな。
2-35	多様な利用	尾瀬の山小屋やVCを含めての尾瀬フェス（一般利用者の参加型のイベント）
2-36	多様な利用	企業のCSRや業界向け、一般利用者向けのイベントなどを充実させることが必要
2-37	多様な利用	沢上り、沢下りが楽しめるツアー
2-38	多様な利用	厳冬期、残雪期の尾瀬利用
2-39	多様な利用	厳冬期は無理にしても、3～4月にかけて残雪期にスキー、スノーシュー、雪上車、スノーモービルなどを利用した大自然の散策。
2-40	多様な利用	鳩待峠～戸倉をケーブルカーで楽しむ
2-41	多様な利用	リフトやゴンドラで尾瀬を上から眺める
2-42	多様な利用	バリアフリー化の話が出るたびに思うのですが、ヘリにより上空から一望できるツアーなども「楽しみ方の多様化」としてあってもいいかな、と思います。相応の利用料（環境付加税みたいなもの）が設定できれば、良いのではないかな。ただし、国立公園域内に着地のヘリポートなどは不要だと思います。
2-43	多様な利用	脱日常感がよい。
2-44	多様な利用	少し不便なぐらいが良いと思う。不便なことが良い。
2-45	多様な利用	空と山が時間とともに姿をかえていくのがよい。
2-46	多様な利用	ある、範囲をそのまま走ったりできたらよかった。
2-47	多様な利用	イベントとして、山小屋の主人の話を聞くようなことも考えても良いのではないかな。
2-48	多様な利用	インタープリターやガイドによる尾瀬を楽しむツアーのさらなる推奨も取り組んでもらいたいです。
2-49	多様な利用	群馬県と福島県は唯一道路で繋がってないという面白さもある。
2-50	多様な利用	尾瀬を訪れる方の多くは静かな尾瀬に身も心も浸りたいのではないかな。アウトドア体験などは尾瀬の外でもできるのではないかな。
2-51	多様な利用	もって夜や冬の利用（多様な利用）が進めば、地域も潤い、尾瀬も守られるのではないかな。特に冬の充実は大切で、企画の際にはガイドを付けるなど安全に配慮する必要がある。
2-52	多様な利用	自然を見に来たい人、歴史も含めて尾瀬を学びたい人、楽しみ方にも色々あると思う。色々なパッケージがあってもいいのではないかな。自然以外の目的もあれば、旅行業者も色々なツアーが企画できるのではないかな。
2-53	多様な利用	尾瀬を楽しむには、ゆっくりとそして季節・コースを変えて歩くことが大切だと思います。また、周辺地域には魅力ある地域があり、そこでしか見ることができない文化や味わうことができない食があります。周辺をとりこんだゆっくり余裕のあるコンテンツを提供することが必要だと思います。
2-54	多様な利用	メンタルヘルスとしての活用が必要
2-55	多様な利用	着地型観光の参加者が増えているので、取り組む必要があると思う。
2-56	多様な利用	規制が厳しく、尾瀬内で何かをやるというのは難しいと思っている。
2-57	多様な利用	新たな利用のためのルール作りが必要。
3-1	施設整備	牛首や至仏山、燧ヶ岳にトイレが欲しい。

No.	キーワード	意見の概要
3-2	施設整備	山岳域のトイレについては検討した方がよい。
3-3	施設整備	至仏山にトイレや管理小屋があるといい。
3-4	施設整備	トイレまでの道に補助灯くらいは設置してほしい。
3-5	施設整備	もう少し標識が欲しいです。
3-6	施設整備	尾瀬の希少性や価値を説明する標識整備
3-7	施設整備	子どもたちも来るので、もう少し日陰の場所が必要だと思う。
3-8	施設整備	鳩待峠の乗合タクシー場所に雨宿り場所
3-9	施設整備	雨の時の屋根が少ない。
3-10	施設整備	沼尻休憩所の復活を望みます。トイレだけではなく、水場と屋根があるだけでも、利用ルートの選択肢が増える人は多いはず。
3-11	施設整備	富士見峠は、せめて休憩所でも欲しい。場所もアヤマ平側にすればもっと良くなる。
3-12	施設整備	一ノ瀬休憩所の営業がなかったのが、平成29年度シーズンの一番の問題だったと思う。
3-13	施設整備	キャンプ場のテラスの拡張も検討の必要がある。屋根付きの炊事場が欲しい。
3-14	施設整備	山ノ鼻のテング場が雨の日などはドロドロになってしまっかわいそう。水が流れ込む場所なのでテラス化するなど快適に幕営出来るようにした方がよいのでは。
3-15	施設整備	場所によっては、公衆トイレが利用者にとって不便なようなので改善できるとよい。
3-16	施設整備	鳩待峠の登山道の入口が少し分かりにくかったです。
3-17	施設整備	鳩待峠の入口が分かりづらい。入山口の看板の整理&整備。現在地が分かるように、ポイントがわかるような番号表示があるとよいという意見もある。
3-18	施設整備	VCのあり方
3-19	施設整備	VCのあり方
3-20	施設整備	VCのあり方
3-21	施設整備	尾瀬沼の再整備が始まって、尾瀬も終わったと思っている。どうしたいのか分からない。
3-22	施設整備	鳩待峠の駐車場が少ない。
3-23	施設整備	乗合バスにICカードやクレジットカードの導入を言われたことがあるが、それだけの投資をすることは難しい。
3-24	施設整備	高価格帯でも構わないので携行品を少なく出来歩くことの楽しさと自然観察の楽しさに集中できるような宿泊施設があれば。(ゴージャスという意味でなく体力に自信が無かったり若干身体が不自由でも訪れる助けになるような) 具体的には、アフリカなどの国立公園にあるようなスーパーエコリゾート型のホテルなどがあると嬉しい。日本ではまだ旅行者である私たちがエコリゾートの楽しみ方を知らないためどういった心構えで行くべきなのか何が期待できるのかエコツーリズムに不慣れです。尾瀬や阿蘇などから本格的になるといいなと思います。
3-25	施設整備	見晴地区に電気を引いて欲しい。
3-26	施設整備	尾瀬国立公園が独立してから、田代線・木賊口ともに民地と国立公園地の境界の表示を提案してきたが、未だに実現されない。地元民は、山菜、キノコ、釣りや山の資源で生活を支えた人達も居た。境界を越えて採ることが犯罪扱いでは困る。
3-27	施設整備	トイレは汚いし、鳩待峠駐車場には屋根もない。こんなサービスの悪い国立公園はないと思う。利用者も減ると思う。
4-1	登山道整備	山、川、湿原、花などは変えられない(自然の流れ)。できることは、山道整備(綺麗に保たれていなければ魅力半減)
4-2	登山道整備	イベントを実施してお客さんを増やすよりは、まずは受け入れ体制としての登山道整備が大切だと思う。
4-3	登山道整備	木道が滑りにくくなるように工夫して欲しい。
4-4	登山道整備	少子高齢化
4-5	登山道整備	これから時代は、高齢者の方でも尾瀬(特に尾瀬沼)に来れるような道や手段があると良い。
4-6	登山道整備	動く木道があるといいです。
4-7	登山道整備	至仏山から、山ノ鼻へ下山することができたら、登山のプランニングが、もっとやりやすくなる。
4-8	登山道整備	尾瀬沼南岸は残雪期は閉鎖されるので、早くから1周できるようにして欲しい
4-9	登山道整備	登山道が閉鎖されていることは魅力の減少に繋がるので避けたい
4-10	登山道整備	見晴新道の状況が悪い、遅く着く客が多く、手前の山小屋に泊まるよう促したこともある。
4-10	登山道整備	見晴新道と南岸の道が悪いので対応して欲しい。

No.	キーワード		意見の概要
4-11	登山道整備		燧ヶ岳の長英新道で帰り道に迷った。道標をしっかりと欲しい。
4-12	登山道整備		至仏山の登山道がもっときれいだったらもっといいと思いました。
4-13	登山道整備		大清水方面の登山道を綺麗にして欲しい。
4-14	登山道整備		尾瀬沼と尾瀬ヶ原の両方を楽しんでいただくためには、白砂峠周辺の道が歩きやすくなると良いと思う。
4-15	登山道整備		山ノ鼻～逆さ燧まで観察目的の木道退避スペース設置
4-16	登山道整備		山ノ鼻～逆さ燧まで木道ワイド化
4-17	登山道整備		ベンチの頻度を増やして欲しい。
4-18	登山道整備		木道、道標の整備が大切である。尾瀬ヶ原はプレート式の標識でも良い。
4-19	登山道整備		道標の整備を進める必要あり。目的地までの距離などを入れると利用者に喜ばれる。登山技術のレベルによって表示を分けても良いのではないか。
4-20	登山道整備		燧裏林道は場所によっては、木道がない方が良い場所がある。
4-21	登山道整備		燧裏林道を倒木などを利用して歩きやすくすることは賛成。木道が老朽化して危険な箇所は撤去して良いのではないか。
4-22	登山道整備		見晴新道に見所がない。ひょうたん池に行く道をつけても良いのではないか。また、頂上近くに道をつけても良いのではないか。
4-23	登山道整備		ナデツ蓬は、注意喚起させできれば登山道として問題ない。アヤマ平の一部、尾瀬沼南岸の痛みが酷い。
4-24	登山道整備		木道、登山道の整備をしっかりと行って欲しい。
4-25	登山道整備		①尾瀬沼南岸の登山道（木道含む）が最悪②尾瀬沼Vc～三平下までの木道が壊れている部分が最悪→お客様にお勧め出来ないで楽しめない、寿命が比較的長い材料はないものか
4-26	登山道整備		廃道になりつつある只見川沿い（渋沢温泉経由）三条の滝→尾瀬ヶ原コースを復活できれば、新潟コースとして尾瀬の混まない穴場としてお薦めできると思います（森の中を歩くので夏も涼しい）。
4-27	登山道整備		小沢平、渋沢の大滝の登山道の管理、渋沢温泉小屋の跡地利用、富士見小屋を含めた休憩施設が欲しい。
4-28	登山道整備		駒ヶ岳のテレビ放映を見て、木道の荒廃に驚きました。尾瀬国立公園に編入される以前よりも酷い状況に見えました。村の説明などによると、限られた予算はどうしても尾瀬そのもの（尾瀬ヶ原・尾瀬沼方面）の方が優先となり、駒ヶ岳は後手に回るとのことでしたが、駒ヶ岳も尾瀬の一部となった今は、同一歩調で木道の整備を進めるべきだと思います。
4-29	登山道整備	利用分散化	大清水ルートの登山道の荒れ方はあまりにもひどく、あれではせっかく分散化で大清水ルートを使って入山したとしても、リピーターは増えないと思います。
4-30	登山道整備		人々の関心は、どうしてもメインルートや登山者が多いところに集中しがちです。一方で登山者が少なく話題になることも少ないルートは忘れられがちです。忘れずとも、問題・課題があっても優先順位を落とされて後回しにされることが多いと思います。放っておいたら取り返しのつかない荒廃に至るケースや、修復に莫大な費用がかかるようになるケースも考えられます。
4-31	登山道整備		木道のリサイクルも考えた方がいいのではないか。
4-32	登山道整備	受益者負担	木道のオーナー制度を導入するのはどうか。1基や1mなどの単位で値段を決めて全国に呼びかけることで、木道以上の費用が捻出できる可能性もあるのではないか。
4-33	登山道整備	サポート体制の構築	登山道や木道の整備など、また地道な調査などでもっとボランティアの力を使っていいかがでしょうか？（ただし、個々が勝手にやるような活動ではなく、統率のとれた団体による対応が必要。財団ボランティアで対応するのであれば、個々が勝手にやらないようコントロールが必要と考えます。そのためにも尾瀬パークボランティアの復活を期待します。
4-34	登山道整備		実験中の樹脂木道が上手くいったら、耐用年数を考慮して、導入が進むことを願います。年数が伸びれば、設置と撤去の人件費がかなり節約でき、現在ボロボロのメイン以外のルート整備に当てられるのではないのでしょうか。
5-1	通信環境整備		携帯が通じない現実を知ると、なかなか働いてくれる若者少ない。
5-2	通信環境整備		安全面を考えると全域で携帯が使える必要があると思う。
5-3	通信環境整備		前回来た時に、携帯が全くつながらずに、下山した時に、大変心配されました。
5-4	通信環境整備	情報発信のあり方	携帯が繋がったらSNSで発信してくれる。
5-5	通信環境整備		携帯が繋がらないから良いという人もいるので意見は分かれる。
5-6	通信環境整備		携帯については、積極的に外で使えるようになる必要はないと思っているが、結局はマナーの問題。
5-7	通信環境整備		電波を無理に小屋内に限定する意味が分からない。携帯が繋がることが、自然に悪影響があるとも思えない。ルールやマナーの問題だと思う。
5-8	通信環境整備		携帯電話は宿泊場所の中だけ使えれば十分。全域である必要はない。

No.	キーワード		意見の概要
5-9	通信環境整備	外国人対応	特に、外国人からはWi-Fiの需要が高い。
5-10	通信環境整備	ルール・マナーの普及啓発	通信環境が整備されてスマホのながら歩きが増えるのは困る。マナー・ルールづくりが必要で、そういったものが尾瀬から全国に発信されたら良いと思う。
5-11	通信環境整備	情報発信のあり方	尾瀬でもスマホは使えると思いますので、入山者に尾瀬周辺の天気予報（特に雷予報）、入山規制情報や注意情報コースガイド、動植物のリアルタイムガイド、簡単登山計画書提出サイト、尾瀬登山者向けの掲示板、充電サービスなど、スマホや携帯で安全な登山が楽しめるような情報を双方向でやり取りできるようにしても良いのではないかと思います。大人から子どもまで、幅広い人々が節度を持って尾瀬に入山して保護や保全に関心をもち続けている事こそが尾瀬の将来を明るくするのではないかと思います。
5-12	通信環境整備	情報発信のあり方	あまりスマホなどを見て歩かれるのも問題ですが、「尾瀬アプリ」を開発して、登山地図機能（現在地も表示）、現地の気温や気候がわかる天気予報の情報提供、看板に設置してあるQRコードを読み込めば動植物や地名などの情報が入手できたりするのもよい。
6-1	入山口の魅力アップ		大清水湿原のミズバショウを復活させたい
6-2	入山口の魅力アップ		大清水湿原をより魅力ある場所にしたい
6-3	入山口の魅力アップ		悪天候や雨が降っている時、尾瀬に入れない時などに尾瀬に関して楽しめる様な工夫が必要。利用者は帰るしかない。
6-4	入山口の魅力アップ		尾瀬だけでなく、村の魅力をもっと出していこうと考えている。
6-5	入山口の魅力アップ		時代の流れとともに、人の価値観や指向はどんどん変わって来ました。尾瀬の魅力というのは自然の見せる姿だと思っていますが、これを戦略的な意図を持って変えることは難しいと思います。可能なことは、自然の魅力をさらに掘り下げることではないでしょうか。例えば、檜枝岐の曲げわっぱの様な尾瀬の木材の歴史や三島町の網組細工、曲がり家と農の風景など、尾瀬だけでなく周辺の自然も含めた当地の「人と自然の関わり」から生み出されてきた民俗史的な「物事」が近年価値を見直されているようです。
7-1	安全対策	施設整備	ビジターセンターなどで登山用品のレンタルがあるといいのではないかと。
7-2	安全対策	通信環境整備	安全面を考えると全域で携帯が使える必要があると思う。
7-3	安全対策	施設整備	山小屋やビジターセンターに看護婦がいれば、傷病の対応も違ってくると思うので、そういった体制整備も必要と思う。
7-4	安全対策		尾瀬の遭難者が多いということは、安易な入山が多いということなので、救助体制をしっかりとやって欲しい。
7-5	安全対策		地域住民が入山口にいるお陰で、けが人も減ったと思う。
7-6	安全対策		子どもは体調を崩したり、階段で転んで危ないので注意が必要。
7-7	安全対策		防災ヘリは有料にしてもいいと思う。
7-8	安全対策	登山道整備	尾瀬ヶ原のアヤメ平側の山際に登山道があるとカミナリ対策にもなる。
7-9	安全対策	施設整備	雷がなっている時などに避難小屋みたいなものがあると安心するな一と思いました。
7-10	安全対策	情報発信のあり方	手軽な利用で入山者を増やしても、安易な入山は弊害が多いと思う。
7-11	安全対策	少子高齢化	高齢化の時代でもあるので、安全のために高架式木道に手すりを付けたりする必要も出てくるのではないかと。
7-12	安全対策		魚沼ルートが6月1日に開通して、そこから1週間の間にツアー参加者から怪我人が5件発生した。参加者が残雪に対応できていない。
7-13	安全対策		来る前の周知が大切。ツアーも含めて。どれくらい歩くのか（登るのか）、尾瀬は平らなイメージがあるが、山ですよという周知がもっと必要だと思う。
7-14	安全対策		ルートによって、初級・中級・上級のレベル別表示、周知をもっと強化しても良いのではないかと。
7-15	安全対策		ヘリのピックアップポイントを群馬側（鳩待～山の鼻）、見晴新道、（これから尾瀬沼地区）など、個別の地域で地図化して共有しているが、尾瀬全域で（裏燧林道や沼見晴間含め）地図上に落とし、ナンバリングし、福島と群馬の防災ヘリで共有できれば良いと思う。
7-16	安全対策		尾瀬沼の防火体制を強化した方が良い。
7-17	安全対策		木道が整備され、怪我する人は減ったが、無理をする人が増えた印象。
7-18	安全対策		一般の人が現在地を伝えるのに目印がないので、ベンチに番号をふってほしい。
7-19	安全対策		ルール・マナーもそうだが、安全対策についてももっと周知していくべき。乗り合いタクシーやマイクロバスなどでアナウンス（優しく）。ツアーの添乗員やガイドさんがバスの中でしっかり指導して欲しい。
7-20	安全対策		巡視やパトロールをもっと頻繁にやって欲しい。警備隊との入山口指導なども上手くリンクしながらやれると良い。
7-21	安全対策		アヤメ平～竜宮までの長沢新道がとても滑りやすいので整備をして欲しい。見晴・竜宮方面で救助要請があった時、このルートを使うのが距離や時間的に一番短く、富士見峠まで緊急車両も入れるので便利。
7-22	安全対策		木道上で救助者の処置が出来ないのが困る。木道は狭くスペースがないので、湿原に降りることになるが、時々登山者からクレームを言われるところがある。



No.	キーワード		意見の概要
7-23	安全対策		鳩待峠などに人目を避けつつ安定して休ませることが出来る救護小屋が欲しい。そこに付属して救急セットなどがあると良い。
7-24	安全対策		宿泊業関係者に応急処置を出来る人がいると助かる。毎年5、6月に警察と消防との情報交換の場があり、消防の人にファーストエイドの講習をしてもらおう。尾瀬の全山小屋やVCスタッフなど関係者を呼び、講習を受けてもらうのはどうか。
7-25	安全対策		尾瀬エリアでつながる、関係者（警察・消防・山小屋・VCなど）共通で持てる無線があると良い。他の地域では遭対協無線というものもある。
8-1	景観整備		沼山峠展望台の樹が大きくなって景観を損ねているので、何とかしたい。
8-2	景観整備		部屋からの景色を良くしたいが、周りの小屋があつてうまくない。
8-3	景観整備		小屋前のヤナギが大きくなって景観を阻害しているの、切って景観を良くした方がいいと思っている。
8-4	景観整備	情報発信のあり方	SNS映えするお洒落な写真や綺麗な景色の撮れるスポットがあると良い。
8-5	景観整備		道路敷でハンノキやヤナギが繁茂しており、紅葉の時期の魅力が薄れて来ているので整備して欲しい。
9-1	滞在型・周遊型の促進	交通アクセス	アクセスが良くなったことで、日帰りの利用者が増えている。もっと周遊などしてもらった方が良い。
9-2	滞在型・周遊型の促進		入山者に対する宿泊客の割合は約2割。また、人気のある山小屋に宿泊客が集中する傾向がある。
9-3	滞在型・周遊型の促進		周遊型を進めるためには、お客さんをいかにつかむかであり、遠方や海外がターゲットとなる。
9-4	滞在型・周遊型の促進	尾瀬ファンの獲得	周遊型・滞在型の推進については、リピーターの確保をいかに進めるかであり、利用者の満足度を高めていくことが大切である。
9-5	滞在型・周遊型の促進	新たな楽しみ方	散策のスタンプラリーは今年やりましたが、宿泊スタンプラリー、ビジターセンターなどでの観察会などへの参加スタンプラリーなどで、尾瀬をゆっくり楽しんでもらいたいです。（日帰り弾丸ツアーとかではなく）
9-6	滞在型・周遊型の促進	情報発信のあり方	首都圏は日帰りを中心となっているので、早朝にしか体験できないことや夜しかできないことなどをPRするとともに、イベント実施など、独自のイベントを行うことも必要。
9-7	滞在型・周遊型の促進	尾瀬の魅力向上	宿泊業者の特徴ある運営。同じ様な小屋が点在し差異がないので新しい形を造る。
9-8	滞在型・周遊型の促進	ガイド	宿泊業者とガイドとの連携
9-9	滞在型・周遊型の促進	情報発信のあり方	魚沼→群馬、群馬→魚沼など、連携してPRできたらと考えている。
10-1	利用分散化		平日誘客への取り組み・宣伝 例) 平日割引（駐車場、バス、宿泊）、ポイントカード平日2倍、スタンプラリーなど
10-2	利用分散化	登山道整備	富士見下～富士見峠間の林道が整備できれば、利用分散にもなるのではないかと。
10-3	利用分散化		登山者の入山口分散化策ですが、単に業者や世間に呼びかけだけでは実効は上がらないと思います。どうしても、土日祝日に集中するのは仕方ないことです。楽に入れる鳩待峠や沼山峠が選ばれるのも然りです。抜本的な思い切った対策（たとえば、鳩待峠は津奈木橋から、富士見口は田代ヶ原から徒歩にする。または富士見小屋まで公共交通を導入するなど）に踏み切らない限り良好な変化は期待できないのではないのでしょうか。
10-4	利用分散化	交通アクセス	利用分散の意味でも、もっと早くから低公害車運行を始めて欲しい。経済的な効果もあるし、利用者の満足度も高くなると思う。遭難などの危険は、防止する対策をしっかりと考えなければ良くならないのではないかと。
10-5	利用分散化	交通アクセス	利用分散を考える上では、低公害車がミズバショウ期に運行していないのはもったいないのではないかと。
10-6	利用分散化		大清水～ノ瀬間を舗装することができれば、毎年のメンテナンスコストを抑えられるはず。
10-7	利用分散化	自然景観の保全	入山者（利用者）の利便性を優先して作られた施策、例えばノ瀬までのバスなどは見直すべきです。
10-8	利用分散化	交通アクセス	大清水～ノ瀬間の低公害車は、事前予約ができないことから旅行エージェントとしては使い勝手が悪い。可能であれば事前予約を可能として欲しい。
10-9	利用分散化	交通アクセス	大清水～ノ瀬間でツアーを受けるためには、マイクロバスなども利用できるようなした方がいいのではないかと。
10-10	利用分散化		もっと富士見峠や大清水からの利用が増えないと、尾瀬全体が盛り上がりません。
			富士見峠まで車（またはケーブル？）で入れるようにして欲しい。分散化には有効だと思う。
10-11	利用分散化		鳩待峠からの入山者を分散化させるためにも、津名木から歩かせるのも手かと思えます
10-12	利用分散化	情報発信のあり方	8月下旬から紅葉までは、本当にお客さんが少ないので、閑散期のPRを上手くする必要がある。
10-13	利用分散化	情報発信のあり方	ピークの平準化が必要だと思う。
10-14	利用分散化		オーバーユースが懸念されるミズバショウ・ニッコウキスゲ・紅葉の最盛期の週末は何とかすべきです。この時期の貸切バスでの団体入山は拒否すべきと考えます。

No.	キーワード		意見の概要
10-15	利用分散化	情報発信のあり方	現在、入山者はミズバショウやニッコウキスゲの時期に偏っているので、もっと自然の多様性を見てもらえるようにシフトした方がよい。
10-16	利用分散化		入山者の分散化と言っている割には、鳩待峠からの入山を推奨する施策が多くとられている（入山する人に対しての設備面、交通面での優遇）。
10-17	利用分散化	情報発信のあり方	尾瀬地域には現在でも様々なルートがありますが、ごく限られた登山者しか入らないコースがたくさんあります。これらを再整備して結ぶ入郷（基地）を含めて発信することにより地域全体が活性化する可能性もあります。登山者が分散し、利用する登山道が分散すれば、かかる自然への負荷も軽減が期待できますし、登山者にすれば新たな景観や楽しみが開けます。人目の少ない登山道では、盗掘のリスクも高くなることが予想されます。
10-18	利用分散化		利用分散は自然への負荷軽減だけでなく、損益にも影響があると思う。分散して利用してもらえれば、宿泊を断るような損は無くなる。
10-19	利用分散化		他の山域の山小屋は詰め込むが、尾瀬は詰め込まないので、それなら土日は尾瀬に行った方がよいという考え方もある気がする。
10-20	利用分散化	情報発信のあり方	利用分散のPRだけでは、真の意味での利用分散はできない。
10-21	利用分散化		多くの人は土日休みなので、利用の分散化をするなら退職した世代には平日に来てもらう必要があるのではないかな。
10-22	利用分散化		以前に比べると休みが取りやすくなっているので、金土・日月での利用であれば推進できるのではないかな。
10-23	利用分散化		利用分散は難しい課題である。首都圏からの入山者が、鳩待峠に集中するのはやむを得ない。
10-24	利用分散化		土日を避けて平日に尾瀬に行ったら、子どもたちが多くて嫌になったという声を聞いたことがある。
10-25	利用分散化	交通アクセス	入山口の分散化について、大清水～ノ瀬の低公害車が導入されていますが、富士見下ルートなどへも波及すると思います。何よりも、震災以来、東京方面から沼山峠への夜行バスルートがなくなったことが、東京都民としては選択肢が狭まり残念です。これは、民間業者の問題ではありますが、働きかけをしていただくと、入山口の利用分散につながるのではないのでしょうか。
10-26	利用分散化		バスの運行に関する改正の影響から、大清水から入る尾瀬沼への日帰りバスツアーの実施は、より不可能となってしまった。
11-1	ルール・マナーの普及啓発		ストックを使うと、周辺の植生を突いてしまって良くない。
11-2	ルール・マナーの普及啓発		歩きタバコなどにうんざりしたので、規制して欲しい、
11-3	ルール・マナーの普及啓発	情報発信のあり方	入山者に、尾瀬についての正しい知識を持って知ってもらうことが重要（バスをおりたら木道と湿原が広がっているのは間違いで、必ず峠を越えて入らないといけない。湿原に敷かれている木道設置の意味。なぜ国立公園に指定されているのか。特別保護地区である理由など）。
11-4	ルール・マナーの普及啓発	V Cのあり方	登山人口の減少対策としては、ガラパゴス諸島のように、必ず入る前に何時間かのレクチャー受講が必要だと思います。尾瀬でも自然や今までの保護・保全の歴史、自然への向き合い方やマナーを知ってもらうことが大切で、こうした活動で培われた意識や態度は、尾瀬だけではなく全国や世界に拡散していきます。どこでどのように行かのかの課題はありますが、必要なことです。ビジターセンターが実施している啓発活動、小屋などの宿泊者向け自然解説以上の取り組みは考えられないのでしょうか。
11-5	ルール・マナーの普及啓発	情報発信のあり方	尾瀬について紹介するネット情報を正しいものとする必要がある。旅行会社は、パンフレットにしっかり明記する必要がある。シャトルバスや旅行会社の車内で正しい知識の教育を行うなどして、安易な入山を防ぐようにしてもらいたい。
11-6	ルール・マナーの普及啓発	情報発信のあり方	気軽に行ける高原ではなく、山であることを認識してもらい、それなりの装備で入山してもらうこと。
11-7	ルール・マナーの普及啓発		環境保全に対応した石鹸・シャンプーを開発して採用して頂くと共に、環境意識の高い消費者に販売することで、尾瀬を保全して頂きたい
11-8	ルール・マナーの普及啓発		今回初めてドローンを見て、音とか自然の景色を邪魔してあまり好ましくないと感じました。危険なことがあってからは遅いので早期に規制した方がいい。
11-9	ルール・マナーの普及啓発	若い世代の誘致	若い人を呼ぶ準備として、より一層のルール・マナーの普及啓発が必要。
11-10	ルール・マナーの普及啓発		旅行会社からしっかりマナーを参加者に伝えてもらうようにして欲しい。
11-11	ルール・マナーの普及啓発	安全対策	尾瀬に来て楽しむ権利は、全ての人にあることは言うまでもありませんが、それでは尾瀬の抱えている諸問題は解決できません。例えば、現在の一部ツアーには、安全性を含め改善を求めたい事例が少なからず見受けられます。そのため、異常に多い山岳ヘリの出動回数の常態化を招いていると思います。生涯教育の時代を迎え、今後高齢者の利用がますます多くなることが予想され、安全面での対策が課題となります。山歩きに対する準備や事前知識のない入山は、規制の対象とすべきではないのでしょうか。
12-1	ゾーニング		対象とする利用者層によって尾瀬内のゾーニングを分けて整備していくことが、保全と利用に繋がってくると思う。
13-1	ガイド	情報発信	ガイドツアーのPR
13-2	ガイド		人によって差があるので、尾瀬認定ガイドの人材育成と向上が必要である。

No.	キーワード		意見の概要
13-3	ガイド		地元のベテランガイドが高齢化しているため、そういった方が現役の間によく尾瀬の歴史などを学んだ方がよい。
13-4	ガイド		ガイドがいつでもどこでも気軽に依頼できるシステムや拠点作り。
13-5	ガイド		ガイドになる要件に、「尾瀬で自然保護活動を～時間実施していること」というような内容を入れてもいいのではないか。そういった様々な体験をしている方の話の方が面白いと思う。
13-6	ガイド		エコツーリズム推進協議会の設置
14-1	交通アクセス		若い人は車を持っていないことが多く、アクセスの悪い檜枝岐には来にくい。
14-2	交通アクセス		戸倉～大清水のアクセスが不便だと思うので改善した方がよい。
14-3	交通アクセス		田代山や帝釈山の山開きの際に、バスの時間を合わせるなど連携して縦走できるようにできたらよいと思っている。
14-4	交通アクセス		交通弱者の利便性を高めることが重要。
14-5	交通アクセス		片品村戸倉の駐車場は、檜枝岐村御池の駐車場みたいに宿泊客は無料にならないだろうか。
14-6	交通アクセス		尾瀬への早朝のアクセスを良くして欲しい。
14-7	交通アクセス		顧客からの声としては尾瀬へのアクセスに関するものが多い。公共交通機関では行きづらい、自動車で行くと渋滞に巻き込まれる、といった意見。
14-8	交通アクセス		尾瀬へのアクセスが悪い。これを改善する必要がある。
14-9	交通アクセス		御池から沼山峠への一般車乗り入れができず不便を感じている。尾瀬が遠くなってきている。
14-10	交通アクセス	情報発信のあり方	首都圏の人は、尾瀬を遠いところと思っている人が多い。実際、首都圏から尾瀬へのアクセスの良さがしっかりPRできていない。
14-11	交通アクセス		登山口の駐車場・乗合バス代含めて一部分の方には利益かもしれないが、利用者はすぐ尾瀬ヶ原に行けるとしている。
14-12	交通アクセス		交通の便が悪い。沼山峠発15:30.16:00.16:30.17:00位のバスが欲しい。奥只見船も便を増やして欲しい。選択肢が増えた方が利用しやすい。
14-13	交通アクセス		船着き場から御池までの輸送連携に課題を抱えている。もっと頻度高く人を送ればと考えている。
14-14	交通アクセス	情報発信のあり方	魚沼から船で入るルートは、まだまだ認知度が低い状況である。しかし、分散化に繋げるためにも、新規入山者だけでなく尾瀬のリピーターにも違った表情の尾瀬を楽しんでいただきたいと思う。
14-15	交通アクセス		魚沼ルートの利用者が増えにくい要因の一つは、1週間前の完全予約性にもあると思う。
14-16	交通アクセス		御池～尾瀬戸倉までのバスがあるといい。
14-17	交通アクセス		新宿から檜枝岐までの直通便ができればと考えているが、それには色々な所との連携が必要である。
14-18	交通アクセス		戸倉まで夜行バスで来ましたが、戸倉から鳩待峠へのバスの休憩が気になりました。スムーズに鳩待峠まで来れたらいいなと思います。
14-19	交通アクセス		魚沼から行く尾瀬は、移動時間がかかり過ぎて歩き出しの頃には既に疲れている。乗り継ぎなしの一本化というのがあると便利。帰りはぐっすり休めるというメリットがある。
14-20	交通アクセス		現行の戸倉～鳩待峠間のバス料金が高く、利用者にとっては負担である。
14-21	交通アクセス		戸倉～鳩待峠間無料シャトルバス運行（宿泊者に限り）
14-22	交通アクセス		交通体制整備（交通費の検討、利便性向上）
14-23	交通アクセス		日光～片品エクスプレス号は、効果が徐々に出て来た印象。2次交通として推進していきたい。
14-24	交通アクセス		上毛高原から尾瀬に向かうバスが2時間近く乗車するのに大変乗り心地が悪いので、もう少し大きいシートの良いバスを走らせて下さい。
14-25	交通アクセス		東京内→御池直通バス(往復四季以外)が再び運行されるようになると会津駒ヶ岳に行きやすくなります。公共交通機関で帝釈山・田代山・台倉高山の登山口にオサバ草以外の夏に行けると嬉しいです。

尾瀬サミットおよび尾瀬国立公園10周年記念式典における各県知事等の意見

①尾瀬サミット第1部パネルディスカッション

氏名	内容	新尾瀬ビジョンでの反映
群馬県知事・ 大澤正明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いかに尾瀬が知られていないか、せっかく国立公園になったのにこんなに知らないのかという思いがいたしまして、それでその翌年から尾瀬学校を始めて、(中略)はや10年がたちます。</li> <li>・尾瀬高校生が今学んでいること、いろんなことを実践してくれたら、尾瀬はもっともっと魅力が大きくなって、多くの子どもたち、学生が尾瀬を訪れてくれるのではないかと考えております。</li> </ul>	「みんなで守る」 視点④尾瀬で学ぶ機会の拡大 ■環境教育の推進
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まだまだ尾瀬の知名度が少ない、確かにそうだと思う。</li> </ul>	「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これからみんなと一緒にあって、尾瀬保護財団、群馬県、そして新潟県、福島県、3県が一緒になって皆さんの意見を聞きながら、この尾瀬の適正な利用と保護を真剣に取り組んでいきたい。</li> </ul>	「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり ■多様な主体の参加と連携促進
福島県知事・ 内堀雅雄	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(ディスカッションに参加した)7名、また尾瀬高校のメンバーには、尾瀬の語り部として、日本に、世界に、この尾瀬の魅力を伝えていただきたいと思います。</li> </ul>	「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(ディスカッションで)共通してあったのは、まず知ってもらいたいというお話がありました。特に若い世代が大切だと思います。(中略)お父さん、お母さんたちが彼らを自然環境の中に連れていくのが当たり前だったからだと思います。(中略)ただ、今、赤ちゃんや子どもを育てている世代が自然環境に当たり前に関心しているかというと、そんなことはないんです。</li> </ul>	「みんなで守る」 視点④尾瀬で学ぶ機会の拡大 ■環境教育の推進
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そういう中でやはり大切なのは、先ほど提言があったSNSが重要だと思います。フェイスブック、ツイッター、インスタ、やはりそういったものを若い方は非常によく見えています。(中略)尾瀬の魅力を国内外に発信していくために、ぜひ若い世代の皆さんの思いと、またSNSを通じた広がり、こういったものを活用していただきたいと思います。</li> </ul>	「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上

新潟県知事・ 米山隆一	・尾瀬をより知ってもらいたいという話があったと思うんですけども、次に知ってもらうにはどうするかだと思うんです。知ってもらうには多分表現力だと思います。(中略)コピーライトというんですか、すごくいい言葉があると同じものでも伝わり方が違います。そうすると、(中略)さらに尾瀬をみんなに知ってもらうということになる	「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上
	・SNSは実は言葉にしなくても絵ですから、一発で伝わるんです。でも、同時にあっちでも、こっちでも同じように絵を出してくるわけだから、端的に伝わる絵というのが要るわけですね。要するに、ただ撮るだけじゃなくて、いかに美しく撮るか、いかに人に印象に残るように撮るかみたいなものがきっとSNSの技術で、結構その技術がある人がいるかないかで、これからのいろんな景勝地みたいな土地は、人がどのくらい来るか、知ってもらえるかは全然違うんだと思うんです。	「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上
	・あと、もう1つ想ったのは、(中略)好きをいかに伝えるかというのは難しいんです。(中略)ただ好きと言ったのが相手に伝わるかといってもそうでもなくて、いろんな言葉で、いろんなやり方で、なぜ自分がそれを好きなのかということがうまく伝わると、相手も自分を好きになってくれるんじゃないかなというのがあ	「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上
	・私自身も、本当に子どものころのすばらしい尾瀬をより多くの人に共有してもらいたいと思いますし、私が年をとってもずっと来られる尾瀬でありたいと思います	「みんなの尾瀬」 視点①愛される尾瀬づくり ■多様な利用者の受け入れ 「みんなを楽しむ」 視点③楽しむための土台づくり

## ②尾瀬国立公園10周年記念式典

氏名	内容	新尾瀬ビジョンでの反映
群馬県知事・ 大澤正明	自然環境の原点である国民の宝である尾瀬の貴重な自然を守り、次の世代へ引き継いでいくことは、今生きている私たちの使命であり、今後も関係者と連携をしながら、これからの尾瀬の活性化に向けて努力をしてまいりたいと考えております。	「尾瀬が目指す姿」 「行動理念」
環境省 環境大臣政務官・ 笹川博義	尾瀬における様々な課題に対応するためには、尾瀬に関わる関係者、各年代の方々の連携、協力が不可欠であります。	「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり ■多様な主体の参加と連携促進
	環境省といたしましても、本日お集まりの皆様と、より一層連携、協力しながら、これからの尾瀬がより魅力的で、より多くの方々に親しまれるように努力を積み重ねてまいります。	「尾瀬が目指す姿」 「行動理念」

③尾瀬サミット第2部意見発表

氏名	内容	新尾瀬ビジョンでの反映
群馬県知事・ 大澤正明	<p>・尾瀬の魅力を関係機関で協力し合い、今まで以上に様々な情報発信をしていく必要があると強く感じたところであります。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上</p>
	<p>・本格的な人口減少社会を迎える中、尾瀬国立公園の周辺地域を含めた地域経済をどう維持発展させていくかという点についても、議論していく必要があると思います。</p>	<p>「尾瀬が目指す姿」 「行動理念」</p>
	<p>・山小屋の機能を維持するためにも宿泊を推奨し、さらに外国人入山者への待遇やマナーの啓発にも積極的に取り組んでいく必要があると思います。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 視点③楽しむための土台づくり</p>
	<p>・貴重な尾瀬の自然を守っていくためには、木道や登山道の維持整備はなくてはならないものであります。しかしながら、国、自治体、関係団体の財政状況が厳しくなる中で、施設整備、維持補修、尾瀬を支える資金面の協力など、広く社会に呼びかける新たな仕組みづくりについても検討を進めていく必要がある</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり</p>
	<p>・若い世代にも、もっと尾瀬に訪れていただくため、関係自治体で実施しております環境教育等をより一層推進していく必要性も感じたところであります。</p>	<p>「みんなで守る」 視点④尾瀬で学ぶ機会の拡大 ■環境教育の推進</p>
	<p>・貴重な尾瀬の自然や資源をどう活用していくか、本日の議論にもあったゾーニングや、新たな利用に関するルールづくりも今後の検討課題と考えております。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点①魅力あふれる尾瀬づくり 視点②幅広い楽しみ方の検討</p>
福島県知事・ 内堀雅雄	<p>・昨日から今日にかけて、(中略)1つの思いを共有することができました。それは尾瀬がかけがえのない存在であるということ、(中略)このかけがえのない尾瀬という存在を、(中略)現役世代である我々が、未来の世代のためにしっかり自然環境を保護していくこと、そしてまた、日本はもとより世界にこの尾瀬の素晴らしさを発信していくこと、これが重要だと(中略)痛感しているところであります。</p>	<p>「尾瀬が目指す姿」 「行動理念」</p>
	<p>・そのためには(中略)課題の1つ1つをきちっと解決し、そして、尾瀬の自然環境を守り育てていくことが何よりも大切だと思います。</p>	<p>全体を通して+「行動理念」</p>
	<p>・シカによる植生被害については、(中略)平成28年度から福島県による直接捕獲を実施しており、今年度も引き続き関係町村と連携をして、効果的な捕獲を実施してまいります。また、尾瀬のシカ対策は環境省が策定された管理方針に基づいて、環境省が中心となり、また関係自治体が連携をして継続的に対策を実施していく必要がございます。</p>	<p>「みんなで守る」 視点③野生動物との共存 ■ニホンシカによる被害の低減</p>

	<p>・未来を担う子どもに対する環境教育は、これからの尾瀬を守っていく上でも重要であります。(中略)これからの尾瀬の貴重な自然環境を活用した質の高い環境学習を推進して、生物の多様性、自然との共生の重要性に対する意識の醸成を図って、豊かな自然環境を次世代に、未来に継承してまいります。</p>	<p>「みんなで守る」 視点④尾瀬で学ぶ機会の拡大 ■環境教育の推進</p>
	<p>・4つ目の視点はゾーニングについてであります。これまで尾瀬の保護と適正利用について、関係の皆さんが協力連携しながら、保護活動や施設整備を進めてまいりました。これからの大切なキーワードはバランスであります。両者のバランスをうまくとりながら、保護を超えないという大前提のもとでのいろいろなあり方を皆さんとともに考え、また実行していくことが大切だと考えております。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 「尾瀬が目指す姿」「行動理念」</p>
新潟県知事・米山隆一	<p>・子どもの皆さんが小さいころから自然、尾瀬を初めとする自然に親しんでいただければと思っております。(中略)ぜひ次世代を担う皆さんに、(中略)尾瀬そして自然の楽しさを十分に理解していただければと思っております。</p>	<p>「みんなで守る」 視点④尾瀬で学ぶ機会の拡大 ■環境教育の推進</p>
	<p>・尾瀬がより発展して、より多くの人に知っていただき、そしていつまでもこの尾瀬の自然が守られることを心よりお祈りさせていただきまして、私の挨拶とさせていただきます。</p>	<p>「尾瀬が目指す姿」 「行動理念」</p>
	<p>・日帰りが多くなったということですが、日帰りの方は日帰りの方でそれもニーズですからそれにも対応しつつ、同時にこれから滞在型の宿泊者が多くなるでしょうから、滞在型もPRしていくということになるかと思えます。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 ■滞在型・周遊型の促進</p>
	<p>・成功しているある種の観光地としては、ディズニーランドがございまして、極めてよくサービスが練り込まれていて、かつ極めてうまい具合にPRがされている、しかも、それは統一的にマネージされているのが1つの例ですね。そうすると、いろんな観光地があそこを目指してやっているわけですが、観光地ということちょっと語弊があるかもしれませんが、国立公園としてそういう視点でものをつくっていくというのはこれから必要なのかなと思いました。</p>	<p>全体を通して</p>
環境省 環境大臣政務官・ 笹川博義	<p>・DMO的観点で、楽しみとしてエンターテインメントであり、PRで、それが統一的にマネジメントされている体制をつくれるように頑張りたいとまとめさせていただければと思えます。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり 視点④情報の発信</p>
	<p>・障害者に対しても優しい尾瀬であってほしい、障害者の皆さん方にも、ぜひ尾瀬のすばらしさを知っていただきたい。こういう考え方もぜひ尊重していただければ大変ありがたいと思えます。</p> <p>・今後とも尾瀬が全国のよき手本として、トップランナーとして活躍をするためにも、皆さんの忌憚のない御意見、そしてさらなる御尽力を必要としております。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点①愛される尾瀬づくり ■多様な利用者の受け入れ 「みんなで楽しむ」 視点③楽しむための土台づくり 「みんなの尾瀬」 視点②モデルとなる尾瀬づくり ■先進的な取り組みの推進</p>

④尾瀬サミット第2部における参加者の意見発表(発表順)

氏名	内容	新尾瀬ビジョンでの反映
片品村前村長・千明金造	<p>・尾瀬国立公園が誕生した10年前のサミットの資料に尾瀬にシカの生息が見られるという記述があり、既にシカの問題が出てきております。(中略)10年経っても現状は悪化している状況です。もう個体数を調べるんじゃなくて、いち早く対処していただきたい。そうしなければ尾瀬がとんでもない方向に行くと私はそのように考えています。</p>	<p>「みんなで守る」 視点③野生動物との共存 ■ニホンジカによる被害の低減</p>
	<p>・尾瀬の入山者の減少という、これは尾瀬が決して入山者、あるいは高齢者に優しい入山口ではないと思います。(中略)尾瀬高校の子どもたちの1人が、おじいさんが80を超えて尾瀬に行けないと言っていました。そういう人たちがこれから増えていくのは間違いないと思うんです。宿が閉鎖すれば自然と登山者の安全が確保できなくなります。そうすると尾瀬の自然も守れなくなり確保できなくなる。そのようなことにならないためには、10年、15年先を考えた場合に、やはりもう少し尾瀬に入りやすいようにするべきだと思います。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点①愛される尾瀬づくり ■多様な利用者の受け入れ 「みんなで楽しむ」 視点③楽しむための土台づくり ■施設整備 ■安全対策</p>
	<p>・(利用分散化のために)しっかりした道路にして、そしてこれから恐らく電気自動車なり、さらに続いていくと思いますので、そういった形で道路整備をしっかりと、分散化に向けて取り組んでいただきたいと思えます。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 ■滞在型・周遊型の促進</p>
金井評議員	<p>・出かけられる方の人数が大変少なくなっているということも、いろいろと統計等で伺っておりますが、(中略)その環境を愛するリピーターをしっかりと育てていくことが大事なんじゃないかと思えます。(中略)外国の方たちの数の問題も(中略)50年後、100年後をずっと見通していくということになると、ますますそうした問題は避けて通れないということになるんじゃないかと思えます。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点①愛される尾瀬づくり ■尾瀬のファンづくり ■多様な利用者の受け入れ</p>
齋藤理事	<p>・まだ尾瀬に関してはわかっていないところが多いところではないか。当然それは守っていかなければいけないということになると思えます。</p>	<p>「みんなで守る」 視点①自然豊かな尾瀬づくり 視点⑤科学的知見に基づく保全</p>
坂本理事	<p>・特に目につくのは、ヤチヤナギがものすごく増えてしまっている。これを何とかするためには、なぜ増えたか、なぜそうなったのかということを明らかにするために現状を把握するということ。</p>	<p>「みんなで守る」 視点①自然豊かな尾瀬づくり 視点⑤科学的知見に基づく保全</p>
	<p>・もう1つの問題が、この尾瀬を支える若い研究者が現在非常に少ないということで、今回の学術調査では、若い研究者を育てるために、できるだけ若い人に組織に入ってもらいまして、現場を知って尾瀬に興味を持って、次の尾瀬を背負う人間に育ってほしいというふうに取り組んでいます。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり ■担い手の育成</p>



	<p>・尾瀬に興味を持つように絶えず尾瀬保護財団を通して、情報発信をするということに御協力いただければ幸いです。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上</p>
阿部評議員	<p>・これからどんどん子どもが少なくなっていく時代に、年寄りがどんどん増えている時代になっているわけです。尾瀬というのは非常に入りやすい場所でもありますし、やはり入らないとその良さというのは絶対にわからないので、好きになるかならないかは別として、(中略)子どものときにこういう環境を与えてやるということは、その人たちにとって無駄にはならないと思うので、ぜひ行政からも教育関係への働きかけをもっと積極的にやってほしいなということをつくづく感じます。</p>	<p>「みんなで守る」 視点④尾瀬で学ぶ機会の拡大 ■環境教育の推進</p>
	<p>・高齢者入山者が非常に多いということもあると思うんですけれども、(中略)尾瀬が谷川岳の遭難者を超えているということであったんですけれども、それだけ安易に入りやすくしていると思うんですが、それに対しての救助体制の強化、あるいはそういうものをもっとしっかりとやってほしいという気持ちがあります。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点③楽しむための土台づくり ■安全対策</p>
五十嵐理事	<p>・子どもを含めていろいろやっているんですけれども、若い人たちの入山者が少なくなっているということも現状でありますので、専門学校とか大学の学生たちがもっと尾瀬を知ることが大事じゃないかなと思います。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上</p>
	<p>・例えばどこの大学でもボランティアセンターというのがあるんですね。そのボランティアセンターのサークルなり、部活があるわけですが、その学生たちは日常的なボランティアだけじゃなくて、災害のボランティアとかいろいろ行っているんですけれども、尾瀬にとっては、単に来てもらうだけじゃなくて、ボランティアを含めて尾瀬を知ってもらう、そういった取り組みを各大学のそういう担当の部署に投げかけて(みてはどうかと思いますが)</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり ■多様な主体の参加と連携促進</p>
	<p>・外国人の話が出てきたんですけれども、ツアーで来られる方は多分1回で、リピーターにはならない人がほとんどじゃないかと思うんですけれども、国内の留学生たちはすぐにメールなり、ツイッターで伝えるのがすごく速いです。そういう意味で、留学生たちにやはり、留学生はしっかりとマナーを守る人が多いですから、留学生たちに尾瀬に来てもらう、そういったツアーもこれから考えていただきたいと思うんです。そうすると、母国に帰って正しい情報が伝わっていくと思いますし、またリピーターになってくれるんじゃないかと思えます。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点①愛される尾瀬づくり 視点④情報の発信</p>
	<p>・御寄付をいただいている会社の方たちの社員研修とか社員旅行として尾瀬を使っただき、そうすると家族でまた来ようかなというところにもつながっていくんじゃないかと思えます</p>	<p>「みんなで守る」 視点④尾瀬で学ぶ機会の拡大 ■環境教育の推進</p>

	<p>・安全に安心して尾瀬に来ていただくためには、(中略)、まずは事故防止のための登山ルートというのは今までもやってきてくださっていますけれども、これも大事なことだと思いますし、それから、いざというときの非常時サポート体制というのも重要かと思えます。(中略)看護師の資格を持っていて勤めをやめた方、そういった方たちに、パートじゃないですけども、繁忙期にビジターセンターの職員という形で雇ってもらったか、(中略)やはり専門職の資格を持った人がその場に来てくださるか、いないかで全然対応が違うと思いますので、そういった体制整備というのも重要だと思います。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点③楽しむための土台づくり ■安全対策</p>
	<p>・昨日からいろいろ話題になっていますけれども、通信機能の整備ですね。(中略)スマホを見ながら歩きとかは問題になっていますけれども、いざというときの情報伝達というのは、事故があったときのことを考えると、これから必要になってくるのかなと。ただ、やはりマナー、ルールづくりというものも重要で、(中略)尾瀬から、スマホなどを使ったときの安全なルールづくり、それが守られているといったことも、全国での第一のところになってくれるといいかなと思います。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点③楽しむための土台づくり ■ルール・マナーの共有</p>
<p>南会津町・ 渡部副町長</p>	<p>・高齢化とか、人口減少、そういったところで、従来地域の人たちが知っている専門的な知識が次の世代に伝わっていかないということが現在の一番の課題だと思っております、町が中心となって次の世代の人たちに自然を渡したい、バトンタッチできる、利用者も感動してくれる自然観光地にいかに進めていくかということ課題に、今議論を重ねているのが現状です。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり ■担い手の育成</p>
<p>辻村評議員</p>	<p>・至仏山の登山道(中略)3カ所は現状の登山道があることが自然を壊すという結論になり、登山道をつけかえたほうがよいという学術的な結論を出させていただいております。それからもう10年以上、事が進んでいないというのはどういうことなのか(中略)1歩でも2歩でも前に進み出して至仏山のお花畑が本当に失われないように、早急に対策をとっていくことがまず必要だと考えています。</p>	<p>「みんなで守る」 視点①自然豊かな尾瀬づくり ■植生の荒廃対策</p>
	<p>・尾瀬全体をどう守っていくのかということですが、もちろんいろんな人たちに来ていただくというのは重要なんですが、やはりそれ相応のスキル、きちっと山であるということを前提とした整備は必要であろうと思います。(中略)利便性を高めていくということは、より新たな事故を起こしていくことにつながりかねませんので、やはり、特別保護地区であれば特別保護地区にふさわしい入り方、スキルを持った人が入るべき場所であるということを宣伝していくことも大事になってきます</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信</p>
	<p>・山岳地域に入りにくい方たちには、違った場所できちっと尾瀬を楽しんでいただけるような、そういうゾーンも必要だろうと。(中略)ちゃんと玄関でしっかりとみんなが楽しめる、深く楽しみたい人はこっちに行く、そうじゃない人たちは玄関で楽しんで帰っていただくというようなつくり込みというか、そういうゾーンを分けて整備をしていくことが、結果的には保全につながっていくのかなと、かつ、利用にもつながっていくのかなと考えています。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 ■利用のあり方の役割分担</p>
	<p>・1つ思っているのは、例えば尾瀬の自然保護に関わっている人たちが、空いた時間を使ってガイドをする。僕がここでこういう保護活動をしているんですよ、その中でどういう問題が見つかっているんですよという話をしてくれるほうが、勉強で得られる知識を教えてもらうよりもより深い味わいを持って受けとめられるんじゃないかと思うので、ぜひ認定ガイドの中に、尾瀬で自然保護活動を月に何時間やっているというような要件を入れて、そういう人たちが案内していくような仕組みがあったほうがいいのではないかと考えています。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり ■多様な主体の参加と連携促進</p>

加瀬評議員	<p>・楽しむ部分、楽しむ場づくりがちょっと足りないんじゃないかと思います。2週間前に、山のキャンプサイトでテント泊をしたんですけれども、(中略)小さいお子さんを連れたファミリーもかなりいました。ところが情報交換をする場、あるいは子どもたち同士で楽しむ場がないんですね。ぜひそのような場をつくっていただいで、認定ガイドの活用も含めて情報交換とかができたらいいんじゃないかと思います。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 ■多様な利用方法の検討 ■エコツーリズムの促進</p>
	<p>・(スライドレクチャーの中で)八木原評議員から若い人が増えているというお話がございましたが、特にほかの山を見ても女性の若い登山者、山ガールというような人たちが増えています。ぜひ尾瀬で婚活イベントを開催していただけたら。(中略)婚活イベントをして、尾瀬で結ばれたカップルが増えたらとてもすてきなことだと思います。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 ■多様な利用方法の検討</p>
	<p>・北アルプスでは山小屋を目当てに登るという人たちが増えています。(中略)独自の魅力を持った山小屋。例えばあそこの山小屋に行くとおいしいスイーツがあるんだよ、(中略)というのをインスタグラムで見ている人たちも増えると思いますし、あるいは外国人向け、アラブ系の人たち向けのハラルフードも尾瀬のあの山小屋に行くと食べられる、そういったいろんな魅力をもう少し山小屋さんも研究していただければと思います。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 ■多様な利用方法の検討</p>
星野評議員	<p>・後継者の問題が大変なんですけど、今年から新潟県魚沼市さんのほうで、ガイド養成事業に取り組んでいただいております。なりわいとして成り立つように、若い方がガイドとしてできるような仕組みができればいいと思っております。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 ■エコツーリズムの促進</p>
臼田評議員	<p>・歩く道に名前をつけたいのかなど。例えば何々ロングトレイル、何々フットパス、こういうような名前をつけられればSNSで発信する際にも非常にわかりやすくなるのかなという気がします。(中略)わかりやすい名前をつけるとみんなもっと親しみやすく尾瀬に来られるのではないかなというふうに考えました。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上</p>
	<p>それから、「夏の思い出」という歌で我々は尾瀬に引きつけられているところもすごくありますので、若い人がこういう歌を知らなくなっているというのは、非常に残念に思っています。若い人、あるいは外国人の方にも発信できるように、例えば英語で発信するとか、そういうところもあったらいいなと思いました。以上でございます。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上</p>
魚沼市・東川副市長	<p>・魚沼から尾瀬に行くルートでございますが、(中略)他の入山口に比べてまだまだ知名度が低いのかなと考えておまして、若者向けのインターネットやSNSで積極的な情報発信に加えて、広い年代層の目にとどまる従来型のメディアなども活用して情報発信をしていく必要があるのかなと考えておまして。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上</p>
	<p>・魚沼ルートにつきまして、今後も入山口の分散化につなげていくことは魚沼市としても重要と考えておまして。新規入山者だけでなく、尾瀬に何度も訪れている方にも、さまざまな表情の尾瀬を楽しんでいただきたいということで、それぞれ魚沼ルートを含めた尾瀬の魅力に関係機関と連携を図りながら情報発信していきたいと考えておまして。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上</p>

関根評議員	・ぜひ尾瀬の山小屋を利用させていただいて、朝夕の尾瀬のすばらしさを体感していただきたいと思っております。	「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 ■滞在型・周遊型の促進
	・尾瀬に来た人、または来る人に対して、もっともっと尾瀬をPRしていく、知らしめるということが大切ではないか、こういうPRをぜひお願いしたいと思っております。	「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■尾瀬の認知度の向上
檜枝岐村・星村長	・現在尾瀬の入山者、宿泊者が非常に少なくなっておりまして、(中略)非常に山小屋の厳しい経営という現実がございまして、従業員の方も少なくなっております。そうしますと、これまでのように環境保全や遭難救助といったことに携わっていくことが非常に難しくなっていくと考えられます。	「尾瀬の現状とこれから」 1(6)
	・尾瀬の利用の仕方が、非常に日帰り客が多くなってきておりまして、尾瀬の持つすばらしい景観であるとか、動植物であるとか、そういったものをじっくりと観察するのではなく、ただ地点地点を移動するだけというような利用の仕方が多くなっている気がします。(中略)尾瀬の現状や山小屋の状況、それから山小屋に泊まって得られるものなどを、もう少し広くみんなで一緒になってアピールして、山小屋が活性化していくことが尾瀬の活性化にもつながっていくと思います。	「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討 ■滞在型・周遊型の促進
周藤評議員	・(尾瀬)全体を総合的に科学的に、しかもわかりやすく、(中略)お示しすることが非常に大切なんじゃないか。生物多様性じゃないですけども、いろんな趣味や興味を持って尾瀬に訪れますので、そういう観点も必要なんじゃないかなと感じています。	「みんなで守る」 視点①自然豊かな尾瀬づくり ■貴重な自然環境の保護
新井理事	・やっぱりラムサール条約というのを1つ表記してもいいのかなと思いました。	「尾瀬の現状とこれから」2(2)
	・全く人がいなくなるような時期も何か工夫して、そういったところにも尾瀬の魅力が発見できて、発信できるようなことがあればいいなということで、皆さんでお知恵を絞っていただければありがたい	「みんなで楽しむ」 視点②幅広い楽しみ方の検討
内山評議員	・やはり情報発信のためには、情報の提供が必要なわけです。地元の新聞記者はほとんど何も知りません。だから、それから勉強するんですが、教えてくれる人、こんなこともあるんだよと気軽にアドバイスしてくれる人というのも大切ですね。	「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■認知度の向上
松井評議員	・入山口までのアクセスがよくわからない、あまりアクセスはよくないねという声があります。(中略)わかりづらいということに関しては、各関係機関が連携して、ホームページ等も活用しながらPRしていくということも必要ではないでしょうか	「みんなの尾瀬」 視点④情報の発信 ■認知度の向上
	・外国人の入山者が増えている、あるいはこれから入山者を増やしていくという中にあるのは、外国の方の入山者増が見込まれる。みんなで尾瀬を楽しんで、それから次世代にしっかり引き継いでいくということを考えると、外国の方に対して、(中略)各入山口に注意事項、これも日本語だけではなくて、英語、できれば中国語、韓国語というような表記の掲示板を設置する、あるいはこれまで取り組んできたことに対して、ショートレクみたいなものも考えてもいいのではないかと思います。	「みんなで楽しむ」 視点③楽しむための土台づくり 視点④自然を損なわない適正な利用の推進

八木原評議員	<p>・日本はかなり高齢社会になっている。そうすると外国人を何とか呼び込みたくなれば、登ること以外の楽しみも必要になってくるわけで、(中略)もし使えるのであれば、今、人気のジビエ料理とかそんなものに使えば、鹿も減らして、そして山小屋でいろんな料理を考えてくれれば、それも売り物になるだろうと思います。</p>	<p>「みんなで守る」 視点③野生動物との共存 ■ニホンジカによる被害の低減</p>
	<p>・(山の中での屎尿対策としての)トイレについては、(中略)移動式でいいわけで、ヘリコプターで下ろしてしまえばいいわけですから、そういったトイレも考えると山を汚さないということにもつながるし、便利で喜ばれると思います。</p>	<p>「みんなで守る」 視点①自然豊かな尾瀬づくり ■植生の荒廃対策</p>
	<p>・基本的には英語ということになるんでしょうけれども、比較的人数が見込めるアジアを考えるとやっぱり中国語、韓国語ということで、それこそ山小屋だけでなく、我々全部がそれを考えていかないとだめだと思います。日本に来るんだから日本語を覚えてこいということでは通らないと思います。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点①愛される尾瀬づくり ■多様な利用者の受け入れ</p>
尾形評議員	<p>・登山人口の減少という問題については、やはり大きな問題だと思います。地域の山岳会の減少とか、高体連の登山部の加盟が激減しているということが大きな問題なんです。(中略)登山技術を引き継ぐ、継承する人がいないということになりますと、技術の継承もできませんので、当然登山技術の衰退などにもつながってまいります。そういうことで、どのような形でこれを継承していくというのが大きな問題だと思います。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり ■担い手の育成</p>
	<p>・尾瀬学校の実施、そして山学校の復活、(中略)尾瀬に一生に1度は来られるような体制づくりをやりたいと思います。</p>	<p>「みんなで守る」 視点④尾瀬で学ぶ機会の拡大 ■環境教育の推進</p>
松浦評議員	<p>・木道のオーナー制度の登録をしたらどうかということで、国立公園というのは、(中略)厳しい法律の絡みがあって何もできないというところがありますけれども、(中略)そのお金を使いながら、またごみ持ち帰り運動とかの運動代にしたり、パンフレットにしたり(するのはどうか)。</p>	<p>「みんなで楽しむ」 視点③楽しむための土台づくり ■施設整備 「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり ■資金的サポートの充実</p>
峯村評議員	<p>・尾瀬でお会いしたお客さんの中から、こんなにいいところなのに、入山料を何も取らないのかという話を聞かれたところがあります。入山者が減っても登山道の整備、それから今のお話のように木道のかげかえ、あるいはトイレ、さらには動植物の調査等、尾瀬の現状を守っていくための費用というのは、これは減らしてはいけないのではないかと思います。(中略)尾瀬を守るためにお金を出してでも尾瀬に来ようと、(中略)そういう人たちをなるべく増やしていく。(中略)自分が行くことによって尾瀬の自然が守れる、そういうふうな形でうまく費用とお客さんと、両方を増やしていけないかなということを感じるんですが、検討していただけたらと思います。</p>	<p>「みんなの尾瀬」 視点③尾瀬を育てる仕組みづくり ■資金的サポートの充実</p>

# 尾瀬国立公園協議会構成員からのご意見

資料 1 - 4

## ■「新尾瀬ビジョン(仮称)」素案(3月8日時点)について

ページ数	指摘箇所	疑問点・修正意見など
P1	「その助けとなるようにビジョンが作られている」	表現が気になる。ビジョンは、「尾瀬が目指す姿」のことではないか。
P3-4	できたこと	「できたこと」と過去形になるので「取り組んできたこと」にしてはどうか
P5-9	尾瀬の現状にある「・」	黒ボツ「・」はやめて、一字スペースの方が良い。箇条書きなら良いが文章なので。
P5	「尾瀬の現状」全体について	一般的なことが多く尾瀬ローカルの記述が少ない。
P6	財政状況の悪化	環境省のことだけでなく他の主体の状況も書いたほうがよい。
P8	(5)多様な主体が参加できる「仕組み」の存在	尾瀬サミットと協議会の順序が逆。協議会を先に挙げるべき。
P10	行動理念1. ~3.	行動理念の整理がまだ甘い。「みんなの尾瀬」に「守る」要素が入っているのでは。
P11	視点①又は③	財団「友の会」の項目を加えて欲しい
P11	視点の順番	視点の順番が気になる。「守る」での歴史伝統文化が上すぎるのでは。
P14	視点③野生動物との共存 ■ニホンジカによる被害の低減	ニホンジカは本来尾瀬にいないはずの存在なので「共存」ではない。低密度管理と「共存」は違う。
P14	視点③野生動物との共存 ■ツキノワグマとの共存	ツキノワグマは「安全対策」の話ではないのか？
P15	視点②幅広い楽しみ方の検討 ■エコツーリズムの促進	単なる「ガイド」の表記から踏み込んで「認定ガイド」の表記が欲しい。認定ガイドの仕組みは、知床と並び尾瀬の評価すべき組織なので付け加えて欲しい。
P15	視点②幅広い楽しみ方の検討 ■利用のあり方の役割分担	意味がわかりにくい。 ※事務局注:ここでは、利用(層・形態)の住み分け(利用のゾーニング)、整備・維持管理水準の設定とコストの選択と集中を表現したい。
P16	視点③楽しむための土台づくり ■望ましい交通アクセスの検討	「利便性向上」とあるが、これ以上便利にする必要があるのか疑問。
P16	視点③楽しむための土台づくり ■安全対策	毎年死亡事故が発生していることを鑑み、もう少し強調できないか。
P16	視点③楽しむための土台づくり ■安全対策	「救助体制の整備や今後のあり方の検討」に委ねるとして、視点④は視点③のルール・マナーの共有にダブルので、視点④を視点③に入れる。 ■施設の整備…楽しめるように適正利用を推進し、必要な… ■ルール・マナーの共有→ルール・マナーの普及啓発 そうすると「安全対策」が一番最後に来て重みが出る。
全体		分かりやすく親しみやすい内容・表現であると思います。ただ、尾瀬の「弱み」(他の国立公園や観光エリアと比較して)についての考察あるいは認識がやや不足しているように感じました。他の国立公園や観光エリアとのベンチマーキングをしっかり行くと、色々なアイデアが生まれるのではないのでしょうか。 (※事務局追記:ベンチマーキングとは、高い成果を達成している他社のやり方を学び、自己のパフォーマンスを最高水準に高める方法を考え出すこと。)

## ■「新尾瀬ビジョン(仮称)」改定の今後のプロセスについて

1	パブリックコメントを行う考えはあるでしょうか。
2	尾瀬ビジョンに比べ、新尾瀬ビジョンは分かりやすい表記になっており歓迎です。
3	9月以降の管理運営計画の策定には、尾瀬国立公園協議会の構成員の意見を十分に反映できるようにしてもらいたい。

## ■尾瀬国立公園協議会のあり方について

1	公開での開催は歓迎です。なお、年号の表記をゆくゆくは2018年、西暦表示が望ましいかと思えます。
---	--